學生

そのお話で厭なのが益〻厭になりました。

先生のお指圖を受けるものは、實に爲合(しあはせ)です。

そこでわたくしは神學でも遣らうかと存じますが。

メフイストフエレス

さうさな。君を方向に迷はせたくはない。

あの學問をして、

邪路に奔らないやうにするのは、頗るむづかしいて。

あの中には毒と見えない毒が澤山隱れてゐて、

それを藥と見分けることが殆ど不可能だ。

まあ、一番都合の好いのは、只一人の講義を聽いて、

その先生の詞どほりを堅く守つてゐるのだね。

一九八〇

一九八五

概して詞に、言句にたよるに限る。

さうすれば不惑の門戸から

堅固の堂宇に入ることが出來る。

學生

併し先生、詞には概念がなくてはなりますまい。

メフイストフエレス

それはさうだ。だが、餘り小心に考へて徒勞をせぬが好い。

なぜと云ふに、丁度概念の無い所へ、

詞が猶豫なく差し出(で)てゐるものだ。

詞で立派に議論が出來る。

詞で學問の系統が組み立てられる。

詞に都合好く信仰を托することが出來る。

一九九〇

一九九五

詞の上ではグレシア(Graecia)のヨタ(yota)の字一字も奪はれない。

學生　二〇〇〇

どうも色々伺つて先生のお暇を潰して濟みませんが、
も少し御面倒を願ひたいのでございます。
どうぞ醫學はどんなものだと云ふことに就いても
しつかりした御一言を承らせて下さいまし。
三年の學期は短いのに、
學問の範圍は實に廣いのです。

先生　二〇〇五

先生がちよいと一言方針を御示下(しめし)さいますと、
それにたよつて探りながらでも進んで行かれませう。

メフイストフエレス　(獨語。)

もうそろ〳〵乾燥無味な調子に厭きて來た。

ちと本色の惡魔で行つて遣るかな。　二〇一〇

(聲高く。)

醫學の要旨は造做もないものだよ。
君は大天地と小天地とを窮めるのだ。
そして詰まる所は、矢張神の思召どほりに、
なるが儘にさせて置くのさ。

君　二〇一五

君がいくらあちこち學問をしようとしてさまよつても、
それは駄目だ。てんでに學ばれる事しか學ばれない。
ところで、なんでも旨く機會を摑まへるのが、
それが本當の男と云ふものだ。
見た所が、君は大ぶ體格が好(い)い。
度胸もなくはないだらう。

フアウスト　二〇二〇

そこで君に自信が出來て來ると、
世間の人も自然に君を信じて來るのだ。
殊に女を旨く扱ふことを修行しなくては行けない。
女と云ふ奴はこゝが痛いの、かしこが苦しいのと、
いろ〳〵な言草の絶える時はない。　二〇二五
それが只一箇所から直すことが出來るのだ。
そこで君がかなり眞面目に遣つて行くと
女どもはみんな君の手の裏にまるめられてしまふ。
なんでも學位か何かがあつて、世間のいろ〳〵な技術より
君の技術が優れてゐると信ぜさせるのが第一だ。　二〇三〇
さてお客になつて遣つて來たら、人の何年も掛かつて
障られない所所を、初對面の印にいぢつて遣る。

脈なんぞを旨く取るのだね。
そして細い腰が、どの位堅く締めてあるかと云ふことを、
熱心らしい、狡猾さうな目附をして、　二〇三五
探つて見て遣るのだね。

學生

さう云ふお話なら、何をどうすると云ふことが分かつて結構です。

メフイストフエレス

兎に角君に敎へるがね。一切の理論は灰いろで、
綠なのは黃金なす生活の木だ。

學生

正直に申しますが、わたくしはどうも夢を見てゐるやうです。
又改めて先生のお說の極深い處を伺ひに　二〇四〇

参りましても宜しうございませうか。

メフイストフエレス

なんでもわしに出來る事なら喜んでてし上げる。

學生

恐れ入りますが、お暇乞をいたすには
此記念帖にお書入を願はなくてはなりません。
どうぞ先生の御眷顧を蒙りましたお印を。

メフイストフエレス

お易い事だ。

（書きて渡す。）

學生（讀む。）

エリチス・シイクト・デウス・スチエンテス・ボヌム・エツト・マルム
Eritis sicut Deus, scientes bonum et malum

（爾等知善與惡。則應如神。）

（恭しく帖を閉ぢて退場。）

メフイストフエレス

その古語の通にしろ。己の姪の蛇の云ふ通にしろ。
一度は貴樣も自分が神のやうなのがこはくなるだらう。

フアウスト登場。

フアウスト

さあ、どこへ行くのだ。

メフイストフエレス

お好な所へ行きませう。
先づ御一しよに小天地を見て、それから大天地を見ます。
まあ、一通の修行を遣つて御覽なさい。

なか〳〵面白くて有益ですよ。

ファウスト

併しこの長い髯の看板どほりに、
氣輕な世間の渡樣は己には出來ない。
所詮遣つて見ても旨くは行くまいて。
己には世間に調子を合せると云ふことが出來たことがない。
人の前に出ると、自分が小さく思はれてならない。
己は間を惡がつてばかりゐるだらうて。

メフイストフエレス　二〇五五

そんな事はどうにかなりますよ。
萬事わたしにお任せなさると、直に調子が分かります。

ファウスト　二〇六〇

そこでどうして此家を出て行くのだ。
馬や車や供なんぞはどこにある。

メフイストフエレス　二〇六五

それはつひ此外套を擴げれば好い。
これに乘つて空を飛んで行くのです。
この大膽な門出には
大きな荷物だけは御免を蒙ります。
わたしが少しばかりの瓦斯を製造しますと、
そいつが造做なく二人を地から捲き上げてくれます。
そこで荷が輕いだけ早く升れる。
新生涯の序開だ。ちよつとおよろこびを申します。

ライプチヒなるアウエルバハの窖（あなぐら）

面白げなる連中の酒宴

フロッシュ

おい。誰も飲んだり、笑ったりせんか。
陰氣な面（つら）をしてゐると、僕が承知しないぞ。
いつでも好く燃える癖に、
けふはなぜ濕った藁のやうになってゐるのだ。

ブランデル

それは君のせいだ。君がなんにも提供しないからだ。
いつもの馬鹿げた事か、下卑た事を遣れば好い。

フロッシュ（ブランデルの頭の上に一杯の酒を澆ぐ）

そんならこれでどっちも濟まさう。

ブランデル

豕（ぶた）に倍した所行だ。

フロッシュ

君が下卑た事を遣れと云ったぢやないか。

ジイベル

誰でも喧嘩をする奴は、戸の外へ出て行け。
胸襟を開いてルンダ・ルンダでも歌はんか。飲め、騒げ。
さあ、遣れ〳〵。ホルラア。ホオ。

アルトマイエル

溜らない。參った〳〵。
誰か綿があるならくれえ。あいつのお蔭で聾になる。

ジイベル

馬鹿言へ。天井が反響をする位でなくては、
バッソオの根本的威力は發揮せられないのだ。
basso

フロッシュ　二〇八五

賛成々々。苦情を言ふ奴は逐ひ出してしまへ。
アア。タラ。ララ。ダア

アルトマイエル

アア。タラ。ララ。ダア。

フロッシュ

さあ、吭の調子は合つた。

（歌ふ。）

愛すべき、神聖なるロオマ帝國よ。
Roma
いかにして猶纔に維持せらるるぞ。

二〇九〇

ブランデル

厭な歌だなあ。いやはや。政治的の歌と來てゐる。
下らない歌だ。ロオマ帝國がどうならうと構はない、
難有い身の上だと、君方は毎朝神に謝するが好い。
僕なんぞは國王でもなけりやあ、宰相でもないのを、
兎に角餘程の利益だと思つてゐる。
幷し我々だつて首領なしではゐられない。
さあいつもの法皇を選擧しようぢやないか。
どんな資格が大事だとか、其人を高めるとか云ふことは、
君方は知つてゐるなあ。

二〇九五

フロッシュ　（歌ふ。）

飛び立てや、鶯。

二一〇〇

戀人に言傳てよ、百千度。

ジイベル

戀人に言傳なんかいらん。そんな事は聞きたくない。

フロッシュ

戀人に言傳をする。キスをする。君のお世話にはならない。

（歌ふ。）

門の戸開けよ。靜けき夜はに。
門の戸開けよ。風流男寢ず。
門の戸させ。朝まだきに。

ジイベル

ふん。澤山歌ふが好い。あんな女を褒めるが好い。
今に僕の笑つて遣る時が來る。

二一〇五

僕を騙した通に、今に君を騙すのだ。
あいつの色には地の精か何かがなつて、
夜の四辻でふざけるが好い。
そこへブロッケン（Brocken）の山から驅けて歸る、年の寄つた山羊の牡が
通り掛かつて、あいつに今晩はと挨拶すると丁度好い。
正眞正銘の血や肉を持つてゐる立派な男は、
あいつの相手には惜しいのだ。
あいつに言傳なんぞをすることがあるものか。
窓に石でも打つ附けて遣るが好い。

ブランデル（卓の上を打つ。）

東西東西。僕の言ふことを聞き給へ。
僕が附合を心得てゐることには、諸君同意だらう。

二一〇

二一一五

二一二〇

こゝに女に迷つた人達がゐます。
その人達に今晩の告別に、自分相應の忠告を
僕がして遣らうと思ひます。
東西。最新の調子の歌だぞ。
合唱の所をしつかり頼むぞ。
（歌ふ。）
牡鼠が穴倉に巣食つた。
餌は脂にバタばかり。
butter
ルテル先生見たやうに
Luther
でつぷり太つてしまつた。
そいつにおさんが毒を飼つた。
鼠は世間が狭うなつた。

胸に戀でもあるやうに。

合唱者（讃呼する如く。）

胸に戀でもあるやうに。

ブランデル

そこらを廻つて飛び出して、
どのどぶからも水を飲んだ。
かじる、引つ掻く、家中を。
どんなに荒れても駄目だつた。
苦しまぎれに飛び上がる。
とう〳〵程なく荒れ止んだ。
胸に戀でもあるやうに。

合唱者

胸に戀でもあるやうに。

ブランデル

晝の日なかによろ〳〵と
臺所まで驅けて出て、
竈の隅に打つ附かり、
ぴくつき、倒れて蟲の息。
おさんは見附けて噴き出した。
お聞よ、笛の吹きじまひ。
胸に戀でもあるやうに。

合唱者

胸に戀でもあるやうに。

ジイベル

凡俗どものあの面白がりやうはどうだ。
可哀さうに。鼠に毒を食はせる位が
丁度好い働だらう。

ブランデル

君はひどく鼠が御贔屓だね。

アルトマイエル

太つ腹の禿頭奴。
運が惡くて氣が折れて、お情深くおなり遊ばした。
病み腫れた鼠の姿が
丁度先生そつくりだ。

フアウスト、メフイストフエレス登場。

メフイストフエレス

極面白がつてゐる連中を
何より先にお目に掛けよう。これを御覽になると、
世間がどの位氣樂に渡れると云ふことがお分かりになる。
此連中にはどの日も同じ祭日です。
小才を利かせて、大滿足をして、
尻尾を銜へてくる〳〵廻る小猫のやうに、
てんでに狹い間を踊つてゐます。
賜が借りてゐられる間は、
頭痛でもする日の外は、
心配なしに樂んでゐます。

ブランデル 二一六五

そこに來た奴等の樣子を見給へ。

旅から來た奴等だと云ふことがすぐ分かる。
まだ着いてから一時間も立つまい。

フロッシュ 二一七〇

なる程。君の云ふ通だ。僕はライプチヒに謳歌する。
小バリイと云ふ丈あつて、こゝにゐると品が好くなる。

ジイベル

君はあの旅人どもを何者だと思ふ。

フロッシュ

僕が行つて來るから見てゐ給へ。一杯飲ませて、
あいつ等の鼻の穴から蛆を引き出すのは、
子供の齒を拔くより優しいのだ。
なんでも好い家柄の奴には違ない。

高慢げで、そして物事に滿足しない樣子だから。

ブランデル

なに。僕は賭をしよう。あいつ等は山師だよ。

アルトマイエル

さうかも知れないなあ。

フロッシュ

氣を附けて見てゐろ。探を入れて遣るから。

メフイストフエレス（ファウストに。）

惡魔はあいつ等には分かりません。

うぬが領髮を攫まれてゐても分からないのです。

ファウスト

皆さん、今晩は。

二一八〇

ジイベル

今晩は。

（メフイストフエレスを横より覗き、小聲にて。）

おや。あいつは片々の脚が短いやうだぜ。

メフイストフエレス

どうでせう。そちらへ割り込んでもお邪魔ではないでせうか。

どうせ旨い酒なんぞはなささうですから、

面白いお話でも代に伺ひたいのですが。

アルトマイエル

君達は大ぶ口が奢つてゐると見えますね。

フロッシュ

君達はおほ方リッパハの驛を遲く立つたのだらう。

二一八五

あの驛のハンス君と一しよに夕飯を食つてから立つたのぢやないか。　二一九〇
Hans

メフイストフエレス

生憎けふは逢はずに通つて來ましたよ。
此前の度にわたし共が逢つて話した時、
あなた方の事をいろ〳〵噂をしましてね、
どなたにも宜しく申してくれと云ひましたよ。

（メフイストフエレスは此詞と共にフロッシュに會釋す。）

アルトマイエル（小聲にて。）

一本參つたな。向うが旨く遣りをつた。

ジイベル

食へない奴だ。　二一九五

フロッシュ

まあ、默つて見てゐろ。今に遣つ附けるから。

メフイストフエレス

先刻大ぶお稽古の詰んだ聲で
合唱をしてゐられたやうでしたね。
こゝでお歌ひになつたら、
あの圓天井から旨く反響することでせう。

フロッシュ

君達は音樂家ででもあるのかね。　二二〇〇

メフイストフエレス

どういたしまして。下手の横好です。

アルトマイエル

何か一つ歌ひ給へ。

メフイストフエレス

お望なら幾らでも歌ひます。

ジイベル

極新しいのでなくちやあ行けない。

メフイストフエレス

わたしどもは丁度スパニアから歸つたところです。
あそこは酒と歌を本場にしてゐる美しい國ですからね。

（歌ふ。）

昔昔王がゐた。
大きな蚤を持つてゐた。

フロッシュ

聞いたか。蚤だとよ。諸君分かつたかい、

蚤と來ちやあ、僕なんぞは隨分清潔なお客だと思ふ。

メフイストフエレス（歌ふ。）

昔昔王がゐた。
大きな蚤を持つてゐた。
自分の生ませた子のやうに
可哀がつて飼つてゐた。
或る時服屋を呼んで來た。
服屋が早速遣つて來た。
「此若殿の召すやうな
上衣とずぼんの寸を取れ。」

ブランデル

服屋に好くさう云はなくちやあ行けないぜ。

寸尺を間違へないやうにして、
笠の臺が惜しけりやあ、
ずぼんに襞の出來ないやうにするのだ。

メフイストフエレス

天鵝絨爲立、絹爲立、
爲立卸を着こなした。
上衣にや紐が附いてゐる。
十字章さへ下げてある。
すぐ大臣を言ひ附かる。
大きな勳章をぶら下げる。
兄弟までも宮中で
立派なお役にあり附いた。

文官武官貴夫人が
參内すれば責められる。
お后さまでも宮女でも
ちく〳〵螫される、かじられる。
押さへてぷつりと潰したり、
搔いたりしては相成らぬ。
己達ならば蚤なぞが
ちよぴりと螫せばすぐ潰す。

合唱者（讙呼する如く。）

己達ならば蚤なぞが
ちよぴりと螫せばすぐ潰す。

フロッシュ

旨い〳〵。こいつは好かつた。

ジイベル

蚤なんぞはそんな風に遣つ附けべしだ。

ブランデル

指を伸ばして旨くつままなくちや行かん。

アルトマイエル

自由萬歳だ。酒萬歳だ。

メフイストフエレス

わたくしも自由の光榮の爲めに一杯飲みたいのですが、
それにつけても少し酒が好ければ好いと思ひますよ。

ジイベル

二二四五

そんな事は二度とは聞きたくないものだ。

メフイストフエレス

こゝの主人が小言を言はない事なら、
わたくし共の酒藏にあるのを、何か一つ
あなた方に獻上したいのですが。

ジイベル

さあ、さあ、遠慮なしに出し給へ。小言は僕が引き受ける。

二二五〇

フロッシュ

旨い奴を一杯飲ませてくれれば、僕は感謝するね。
ことわつて置くが、あんまりぽつちりでは行けない。
僕に利酒をさせようと云ふには、
口へたつぷり一ぱい入れてくれなくちやあ出來ない。

二二五五

アルトマイエル　（小聲にて。）

なんでもあいつ等はライン地方の奴だぜ。僕の目利では。

メフイストフエレス

ちよいと錐を持つて來させて下さい。

ブランデル　錐をなんにするのだね。

まさかその戸の外まで樽が來てゐるわけでもあるまい。

アルトマイエル

それ、あそこの背後に亭主が道具箱を置いてゐる。

メフイストフエレス

（錐を手に取り、フロッシュに。）

あなたの飲みたい酒を伺ひませう。

フロッシュ

聞いてどうしようと云ふのだね。そんなに色々あるのかね。

メフイストフエレス

どなたにもお望の酒を獻じます。

アルトマイエル　（フロッシュに。）

ははあ。君はもう口なめずりをし始めたな。

フロッシュ

宜しい。僕が所望して好いなら、ラインの葡萄酒にしよう。

なんでも本國産が一番の御馳走だ。

メフイストフエレス

（フロッシュの坐せる邊の卓の縁に、錐にて穴を揉みつつ。）

少し蠟を取り寄せて下さい。すぐに栓をしなくちやあ。

アルトマイエル

ははあ。手品だね。

メフイストフエレス（ブランデルに。）

そこであなたは。

ブランデル

僕はシャンパンにしよう。

好く泡の立つ奴でなくては行けない。

（メフイストフエレス錐を揉む。一人蠟の栓を作りて塞ぐ。）

どうも外國產の物を絶待に避けるわけには行かんて。

好い物が遠國に出來ることがあるからなあ。

本當のドイツ人はフランス人は好かないが、

deutsch France

フランスの酒なら喜んで飲むね。

ジイベル

（メフイストフエレスの坐せる邊に近づきつゝ。）

正直を言へば、僕は酸つぱい酒は嫌だ。

僕には本物の甘い奴を一杯くれ給へ。

メフイストフエレス（錐を揉む。）

そんならあなたの杯にはすぐトカイ酒を注がせます。

Tokay

アルトマイエル

ねえ、君達、僕の方を眞つ直に見て返事をし給へ。

君達は僕なんぞを騙すのに違ない。

メフイストフエレス

飛んだ事です。あなた方のやうな立派なお客に

そんな事をするのは、少し冒險過ぎますからね。

お早く願ひます。どうぞ御遠慮なく仰やい。
どんな酒を獻じませう。

アルトマイエル

なんでも宜しい。うるさく問はないで下さい。

メフイストフエレス

（穴を悉く揉み畢り、栓をなしたる後、怪しげなる身振にて。）

「葡萄は葡萄の蔓になる。
角は山羊の額に生える。
酒は水で、葡萄は木だ。
木卓からも酒は涌く。
自然の奥を窺ふ一目。
これが奇蹟だ。信仰なされい。」

さあ、皆さん、栓を抜いて召し上がれ。

一同

（栓を抜けば各自の杯に所望の酒涌きて入るゆゑ。）

やあ。これは結構な噴水だ。

メフイストフエレス

兎に角飜さないやうに願ひます。

一同

（皆反復して飲み、さて歌ふやうに。）

愉快だ、愉快だ。人の肉食ふ夷のやうに。
五百の豚の群の樣に。

メフイストフエレス

御覽なさい。自由の民だ。あれが鼓腹の樂だ。

ファウスト

己はそろ〳〵行きたいがなあ。

メフイストフエレス

いや。これから氣を附けて見てお出なさい。
盛んに獸性が發揮せられるのですからね。

ジイベル

（手づつなる飲み樣をし、酒を床に飜す。焰燃え立つ。）
助けてくれ。火事だ。助けてくれ。地獄が燃える。

メフイストフエレス（火焰に向ひて唱ふ。）

「鎭まれ。親しき一大。」

（人々に。）

まあ、こん度は一滴の業火で濟みました。

ジイベル

これはなんだ。待て。只では濟まんぞ。
全體我々をなんだと思つてゐる。

フロッシュ

もう一遍あんな眞似をして見ろ。

アルトマイエル

僕はこつそりあいつ等を追つ拂つてしまはうと思ふのだが。

ジイベル

おい。そこの先生。利いた風な。
我々の目を昏ます積か。

メフイストフエレス

默れ。酒樽の古手奴。

ジイベル

なに。帚の柄が。

我々に失敬な事を言ふ積か。

ブランデル

待つてゐろ。拳骨が雨のやうに降るぞ。

アルトマイエル

（殘りたる一つの栓を拔けば、火燄面を撲つ。）

やあ。僕は火傷をする。

ジイベル

魔法だ。

遣つ附けろ。そいつは無籍者だ。

（皆々小刀の鞘を拂ひて、メフイストフエレスに掛かる。）

メフイストフエレス（眞面目らしき態度にて。）

「假現の形。虛妄の詞。

心を轉じ、境を轉ず。

こゝにあれ。又かしこにあれ。」

（一同驚きて立ちたり、互に顏を見合す。）

アルトマイエル

こゝはどこだ。好い景色だなあ。

フロツシユ

葡萄畠だ。本當か知らん。

ジイベル

それに葡萄に手が屆く。

ブランデル

この青い屋根の下に
こんな好い蔓がある。こんな好い葡萄がある。
（ジイベルの鼻を撮む。外の人々も互に鼻を撮み合ひて、手に〳〵小刀を閃す。）

メフイストフエレス　（同上の態度にて。）
「迷惑の輩。目を覆ふ巾を去れ。
記念せよ。魔の遊戯の奈何を。」
（フアウストと共に退場。人々互に手を放す。）

ジイベル
どうしたのだ。

アルトマイエル
これはどうだ。

フロッシュ
今のは君の鼻だつたか。

ブランデル　（ジイベルに。）
僕は君のを撮まんでゐたのか。

アルトマイエル
なんだかかうぴりつと來て、節々に響いたやうだ。
その椅子を借してくれ。僕は倒れさうだから。

フロッシュ
一體どうしたと云ふのだらう。

ジイベル
あいつはどこへ行つた。こん度見附けたら、
生かしては置かない積だ。

アルトマイエル

あいつが酒樽に騎つて、此店の戸を出て行くのを
僕は此目で見たよ。
僕は足が鉛にでもなつたやうに重くてならない。

（卓の方へ向く。）

あゝ。酒はまだ出るか知らん。

ジイベル

皆嘘さ。目を昏ましたのだ。

フロッシユ

僕は實際酒を飲んでゐるやうな氣がしたが。

ブランデル

それはさうとあの葡萄はどうしたのだらう。

アルトマイエル

どうだい。これでは不思議と云ふものがないとは云はれまい。

魔女の厨（くりや）

（低き竈の火の上に、大いなる鍋掛けあり。その鍋より立ち升る蒸氣の中に種々の形象を現ず。尾長猿の牝鍋の傍に蹲り、鍋の中を掻き廻し、煮え越さぬやうにす。尾長猿の牡と小猿等とはその傍に蹲り、火に當りゐる。天井と四壁とは魔女の用ゐる極めて異樣なる器械にて裝飾しあり。）

フアウスト、メフイストフエレス登場。

フアウスト

己は氣違染みた魔法騒（さわぎ）は氣に食はぬ。
この物狂はしい混雑の中で

己の體がなほると、君は受け合ふのか。
己に婆あさんの指圖を受けさせて、
この腐料理で取つた年を三十も
跡へ戻してくれようと云ふのか。
これ以上の智慧が君にないなら、己はもう駄目だ。
己の希望の影はもう消わてしまつた。
一體自然か哲人かがこれまでに
何か靈藥のやうなものを一つ位見出さなかつたのか。

メフイストフエレス

いや。あなたは又理窟を言ひ出しましたね。
それはあなたを若返らせるには、自然的な方法もあります。
併し全く別な本に書いてある

二三四〇

二三四五

奇妙な一章ですよ。

フアウスト

己はそれが知りたい。

メフイストフエレス

宜しい。それは金も醫者も
魔法もなしに獲られる方です。
すぐに野らへお出掛なさい。
そして鋤鍬を使ひ始めるですね。
それから極狹い範圍の内に、
自己と自己の精神とを閉ぢ籠めて置くですね。
食物は交のない物を食ふ。家畜と一しよに
家畜になつて生きる。自分の取入をする畑は、

二三五〇

二三五五

自分で肥やしをするのを不都合とは思はない。
これなら八十になつても若くてゐられる
絶好の手段だと云ふことを、御信用なさつて宜しい。

フアウスト　二三六〇

それは己の慣れぬ事で、手に鋤を取るとまでは、
どうも己は身を落すことが出來ない。
その上狹い範圍の生活も己の柄にない。

メフイストフエレス

すると矢張魔女の厄介になるですな。

フアウスト　二三六五

併しなぜ婆々あでなくてはならんのか。
君が自分でその藥を調合したつて好いだらう。

メフイストフエレス

そいつは難有過ぎた暇潰ですて。そんな暇があると、
魔の橋と云ふのがあるが、わたしは橋を千位掛けます。
あゝ云ふ藥は學術ばかりでは出來ない。　二三七〇
忍耐がなくては駄目です。
靜かに落ち着いた奴が長の年月骨を折つて、
その間に只「時」が藥の發酵を強くするのです。
それに調合が複雜で、
中には不思議な物が這入るのです。　二三七五
無論それも惡魔が授けた方ですが、
惡魔が自身で拵へるわけには行きません。

（獸等を見て。）

御覽なさい。なんと云ふ可哀らしい奴等でせう。
あいつが女中で、あいつが家隷です。

（獸等に。）

お上さんは留守らしいね。

獸　等　二三八〇

烟出から
内を拔け出て
馳走になりに行きました。

メフイストフエレス　二三八五

いつもどの位の間ぶら附いて歸るのだい。

獸　等

わたしどもが手をあぶつてゐる間の留守です。

メフイストフエレス　（フアウストに。）

どうです。あのきやしやな畜生どもは。

フアウスト

己の見た物の中で、此位ぶざまな物はないな。

メフイストフエレス

いやいや。今こいつ等と遣るやうな會話が
わたしは一番好なのです。

（獸等に。）

おい。咀はれた人形ども。お前達に聞くのだが、
そのどろ〳〵した物を搔き交ぜてゐるのはなんだい。

獸　等　二三九〇

これですか。乞食に施す稀い粥です。

メフイストフエレス

そんならお客はおほ勢だな。

牡　猿

（歩み寄り、メフイストフエレスに追従す。）

どうぞすぐに旨い采の目を出して、
わたしに儲けさせて、
わたしを金持にして下さい。
隨分みじめな身の上です。
これでも金さへ持つてゐると、
も少し智慧も出るのです。

メフイストフエレス

分かつてゐるよ。富籤にでも中つたら、

二三九五

二四〇〇

猿も爲合だらうがな。

（此間小猿等大いなる丸を弄びゐたるが、その丸を轉がし出す）

牡　猿

これが世界だ。
上がつたり降りたり、
止所なく廻つてゐる。
丸は硝子の音がする。
こはれるのに造做はない。
中は空洞だ。
あそこは光る。
あそこは猶光る。

二四〇五

丸奴は生きてゐる。
己の好い子だ。
おもちやにするな。
そちや死ぬるのだ。
丸は土燒、
かけらが出來る。

メフイストフエレス

あの篩はなんにするのだい。

牡　猿　（篩を取り卸す。）

若しあなたが盗坊なら、
これですぐに見あらはします。
（牝猿の所に持ち行き、透かし見さす。）

二四一〇

二四一五

さあ、篩で透かして見ろ。
もし盗坊が分かつても、
うつかり口で言ひつこなしだ。

メフイストフエレス　（火に近づきつゝ。）

そんなら此鍋は。

牝牡の猿

馬鹿なお方だ。
鍋一つ御存じない。
釜一つ御存じない。

メフイストフエレス

失敬な畜生だな。

牡　猿

二四一〇

二四一五

この拂子をかう持つて、
その腰掛にお掛けなさい。

（メフイストフエレスを椅子に掛けさす。）

フアウスト

（此間大鏡の前に立ちて、半ばそれに歩み近づき、又半ばそれに歩み遠ざかりゐたるが。）

この己の目に見える、あれはなんだ。この魔の鏡に映るのは、
まあ、なんと云ふ美しい姿だらう。
愛の神に賴むが、お前の翼の一番早いのを貸して、
己をあの女のゐる境へ遣つてくれい。
己がこゝに立ち止まつてゐずに、
鏡の傍へ寄つて行くと、

二四三〇

姿は霧を隔てて見るやうにぼやけて見える。
女と云ふものの一番美しい姿はこれだ。
かうも美しい女の姿が世にあらうか。
この横はつた體に
天と云ふ天の精を見ずばなるまい。
所詮地にはこんな物はないのだから。

二四三五

メフイストフエレス

なんの不思議なものですか。神が六日の間働いて、
最後に自分で喝采したのだから、何か少しは
氣の利いたものが出來てゐなくてはなりません。
差當りあれをたんのうするまで御覽なさい。
今にあなたにあんな好い子を見附けて上げます。

二四四〇

二四四五

厨

運が好くてあんなのの壻になる奴は
爲合者ですね。

（フアウストは依然鏡の中の像を見ゐる。メフイストフエレスは椅子の上にて伸だし、拂子を揮ひつつ語り續く。）

こゝの所一寸王が玉座に着いたと云ふ形だ。
君主の杖も持つてゐる。頭に冠がないばかりだ。

獸　等

（これまで種々の怪しげなる動作をなしゐたるが、此時大聲にて叫び交しつつ冠一つ持ち來て、メフイストフエレスに捧ぐ。）

お願ですから
この冠を

汗と血とで着けて下さい。

（手づつなる持扱ざまをして、冠を二つに割り、そのかけらを持ちて跳り廻る。）

とう〳〵おしまひだ。
口でしやべつて目では見る。
耳では聞いて歌にする。

フアウスト　（鏡に向ひて。）

あゝ、どうしよう。己はどうやら氣が狂ひさうだ。

メフイストフエレス　（獸等を指さす。）

もうかうなると己でさへ頭がぐら〳〵して來る。

獸　等

こつちとらに出來るなら、

厨

こつちとらがして好いなら、
そんならそれが考へだ。

フアウスト　（前の如き態度にて。）

あゝ。己の胸は燃えて來た。
どうぞ一しよに早く逃げてくれ。

メフイストフエレス　（前の如き態度にて。）

兎に角正直に告白する
詩人だとは認めて遣らなくてはなるまい。

（此間牝猿の等閑になしゐたる鍋煮え越す。大いなる火燄燃え立ちて、烟突に向ふ。魔女恐ろしき叫聲をなし、烟突より火燄の中を穿ちて降る。）

魔女

アウ。アウ。アウ。アウ。
咀はれた畜生奴。豕奴。
鍋ははふつて置く。上さんには火傷をさせる。
咀はれた畜生奴。

（フアウスト、メフイストフエレスの二人を見て。）

こゝには何事がある。
お前達は何者だ。
こゝへは何しに來た。
なぜ留守に這ひ込んだ。
お前達は骨骨に
火で燒く痛が見たいのか。

（魔女杓子にて鍋を搔き廻し、フアウスト、メフイストフエレス、

獸等に鐵を彈き掛く。獸等懼れうめく。）

メフイストフエレス

（手に持ちたる拂子を逆にして、柄にてあたりの土器、玻璃器を敲き立つ。）

打ち破れ。打ち破れ。　二四七五
粥は引つ繰り返れ。
硝子はかけらになれ。
これでも洒落だよ。
腐女奴。
手前の歌に合せる拍子だ。　二四八〇

（魔女の憤り且驚きて退くを見つつ。）

やい。骸骨奴。案山子奴。己を見忘れたか。

檀那樣、お師匠樣を見忘りやあがつたか。
實は遠慮はいらんのだ。手前も猫の怪物も、
腕を出せば、敲き潰して遣るのだぞ。
いつ赤い胴着がこはくなくなつたのだ。
幅子に插した鷄の羽が見えんか。
己が面でも隱してゐるかい。　二四八五
己に名告をしろと云ふのかい。

魔女

やあ。檀那。飛んだ御無禮をいたしました。
蹄を隱して入らつしやるものだから。
それに二羽の鴉はどうなさいました。　二四九〇

メフイストフエレス

こん度丈は特別で恕して遣る。
それは顔を合せないことが
大ぶ久しくなつてゐるからな。
それに文化と云ふ奴が世の中を舐め廻して、
惡魔をも只では置かねえのだ。
北國生れのお化はな、もう見ることが出來ないよ。
それ、角や、尻尾や、爪なんぞは見えまいが。
只足丈は無いと不自由だが、
見せては世間の通が惡い。
そこでもう餘程前から、若い奴等がするやうに、
腓腸の贋物を食つ附けて歩いてゐるのよ。

魔　女（踊りつつ。）

二四九五

二五〇〇

サタンの檀那がお出ては、
わしや嬉しうて氣が狂ふ。

メフイストフエレス　Satan

こら。そんな名を口に出すと云ふことがあるか。

魔　女

そりやなぜでございます。あの名がなんといたしました。

メフイストフエレス

あれはな、もうお伽話に書かれてから久しうなる。
その癖人間の爲めには好くはならない。
一人の惡魔はゐなくても、惡人はおほ勢ゐるからな。
兎に角これからは己を男爵閣下と云ふが好い。
華族のうよ〳〵ゐる中の己も華族の一人なのだ。

二五〇五

二五一〇

まさか己の血筋が怪しいとは云ふまい。
それ、己の紋所はこれだ。

（猥褻なる身振をなす。）

魔　女（止所なく笑ふ。）

へ。へ。お前様のお極だ。
矢っ張今でも昔の儘の横着者で入らつしやる。

メフイストフエレス（ファウストに。）

どうです。覺えてお置なさい。
これが魔女の扱振です。

魔　女

そこであなた方の御用向は。

メフイストフエレス

實は例の藥をたつぷり一杯貰ひたいのだ。
だが一番年を食つた好い奴でなくては行けない。
一年増に強く利くのだからな。

魔　女

お易い御用でございます。こゝに一瓶
わたくしのちよい〳〵舐めるのがございます。
もうちつとも臭くはございません。
これを一杯獻じませう。（小聲にて。）
ですが、御承知の通、禁厭なしにあの方が上がると、
一時間とは生きてゐられませんよ。

メフイストフエレス

いゝや。大事な友達だ。好く利かなくてはならない。

手前の臺所の一番好いものが飲ませたいのだ。
手前例の圈をかいて、文句を言つて、
たつぷり一杯上げてくれ。

二五三〇

（魔女怪しげなる動作にて圈をかき、其中に種々の物を排置す　そのうち玻璃器、金屬器自ら鳴りて樂を奏し始む。最後に猿等を圈の中に入れ、大いなる書籍を取り出し、一匹の猿を卓にしてそれを載せ、他の猿には炬を乘らしむ。さてファウストを招きて圈の中に入らしむ。）

ファウスト　（メフイストフエレスに。）
君これはどうすると云ふのだい。
こんな馬鹿げた眞似、氣違染みた爲草、

無趣味極まる欺瞞は
僕は疾うから知つてゐる。大嫌だ。

二五三五

メフイストフエレス
何を氣にするのです。只笑はせるまでですよ。
そんなに窮屈に考へなくても好いぢやありませんか。
あいつも醫者だから、藥が好く利くやうに、
禁厭をして飲ませなくては氣が濟まないのです。
（ファウストを強ひて圈の中に入らしむ。）

魔　女
（大袈裟なるこれ見よがしの表情にて、書の中より朗讀し始む。）
「汝須らく會すべし。
一より十を作せ。

二五四〇

二は去るに任せよ。
而して徑ちに三に之け。
然らば則ち汝は富まむ。
四は喪失せよ。
五と六とより
七と八とを生せしめよ。
是の如く魔女は說く。
是に於てや成就すべし。
九は則ち一なり。
十は則ち無なり。
之を魔女の九九と謂ふ。」

フアウスト 二五四五

二五五〇

婆あさん熱に浮かされてゐるのぢやあるまいか。

メフイストフエレス 二五五五

まだなか〳〵あんな物ぢやありません。
わたしは好く知つてゐますが、あの本は皆あんな調子です。
隨分あれで暇を潰したこともあります。
なぜと云ふと、丸で矛盾した事は
智者にも愚者にも深秘らしく聞えますからね。
あなたに云ひますが、學術は新しいやうで古い。
原來三と一だの、一と三だのと云つて、
眞理の代に妄想を敎へるのは **二五六〇**
いつの世にもある遣方です。そんな工合に
誰にも邪魔をせられずに饒舌つて敎へてゐます。

誰が馬鹿に搆ふものですか。
大抵人間は只詞ばかりを聞せられると、
何かそれに由つて考へられる筈だと思ふのです。

魔　女（誦し續く。）

「夫れ學術の　二五六五
崇高なる威力は
全世界に秘せらる。
然れども思量せざる者
贈遺の如くに得べし。
勞苦することを須ゐず。」　二五七〇

フアウスト

なんの無意味な事を己達に言つて聞せるのだ。

もう直に此頭が割れさうになつて來る。
己にはなんだか馬鹿が十萬人も
群をなしてしやべつてゐるやうに思はれる。　二五七五

メフイストフエレス

もう好い、好い。えらい巫女さん。
早く藥を持つて來て、杯の縁まで
一ぱいに注いでくれ。
己の友達にはあの藥が障る氣遣はない。
此人はこれまでにもいろんな藥を飲んで見て、
大ぶ位の附いてゐる人だから。　二五八〇

（魔女複雜なる作法をなして藥を杯に注ぐ。それをフアウスト受けて脣に當つるとき、輕き焰燃え立つ。）

搆はずにぐいとお飲なさい。休まずにぐいと。
すぐに好い心持になります。
悪魔と君だの僕だのと云ふあなたが、
火なんぞをこはがるのですか。

（魔女圏を解く。ファウスト脱出す。）

メフイストフエレス　二五八五

さあ、すぐに出掛けませう。ぢつとしてゐては行けません。

魔女

もし、あなた、お薬が好く利くやうにお祈申します。

メフイストフエレス　（魔女に。）

何か返禮に己に頼みたい事があるなら、
ワルプルギスの晩に遠慮なく言ふが好い。
Walpurgis　二五九〇

魔女

それから此歌の本を上げますから、時々お歌なさい。
不思議な利目がございますからね。

メフイストフエレス　（ファウストに。）

さあ、わたしが案内をしますから、早くお出なさい。
薬が内外一面に染みるやうに、
汗を出さなくては行けません。
これから高尚な懶惰の價値を分からせて上げる。
今にあなたの體の中で、愛の神が動き出して
折々跳ね廻るのを、面白くお感じになるのだ。　二五九五

ファウスト

まあ、待つてくれ。一寸今一度あの鏡を見なくては。

あの女の姿があんまり好かつたから。

メフイストフエレス

お廢なさい。お廢なさい。今にあらゆる女の手本になるのを、正味で御覽に入れますから。

（聞えぬやうに。）

あの藥が體に這入つてゐるから、今にどの女でもヘレナに見える。

Helena

二六〇〇

街

フアウスト登場。マルガレエテ通り過ぐ。

フアウスト

もし、美しいお孃さん。不躾ですが、此肘を

二六〇五

あなたにお貸申して、送つてお上申しませう。

マルガレエテ

わたくしはお孃さんではございません。美しくもございません。送つて下さらなくつても、ひとりで内へ歸ります。

（振り放して退場。）

フアウスト

途方もない好い女だ。
これまであんなのは見たことがない。
あんなに行儀が好くておとなしくて、
その癖少しはつんけんもしてゐる。
あの赤い脣や頰のかがやきを、
己は生涯忘れることが出來まい。

二六一〇

あの伏目になつた様子が
己の胸に刻み込まれてしまつた。
それからあの手短に撥ね附けた處が、
溜まらなく嬉しいのだ。

（メフイストフエレス登場。）

おい。あの女を己の手に入れてくれ。

メフイストフエレス

どの女ですか。

フアウスト

今通つて行つた奴だ。

メフイストフエレス

あれですか。あれは今坊主の所から歸るのです。

二六一五

二六二〇

懺悔をして罪の免除を受けて來たのです。
わたしは坊主の椅子の傍を忍んで通つたが、
なんにも持たずに懺悔に行つた、
ひどく罪のない娘ですよ。
あんなのはわたしの手に合ひませんね。

フアウスト

でも滿十四歳にはなつてゐるだらうが。

メフイストフエレス

丸で道樂息子のやうな口の利きやうをしますね。
どの美しい花をも自分の手に入れようとして、
自分の手で摘み取ることの出來ない
戀や情はない筈だと思ふ性ですね。

二六二五

二六三〇

ところがなか〳〵いつもさうは行きませんよ。

フアウスト

おい。道學先生。

どうぞ道德の掟を己に當て嵌めること丈は免してくれ。

それから君に手短に言つて置くがね。

あの旨さうな若々しい肌に　二六三五

今宵己の手が觸れることが出來なかつたら、

夜なかまで待たずに君とお分にするよ。

メフイストフエレス

併し出來る事と出來ない事とは考へて下さい。

探偵して機會を捕へるまでに、

少くも十四日は掛かるのです。　二六四〇

フアウスト

己なんぞは七時間遊んでゐられると、

あんな物を騙して遣るには、

惡魔の手を借るまでもないがなあ。

メフイストフエレス

もうフランス人のやうな物の言ひやうをしますね。　二六四五

だがお願ですから、氣を惡くしないで下さい。

何もすぐに手に入れるのが面白いのではありません。

南の方の國の話に隨分あるやうに、

先づいろ〳〵な前狂言をして、

あの人形をあつちこつち

揑ね廻したり躾けたりするのが、　二六五〇

却つて手に入れた時より面白いものです。

フアウスト

そんな面倒をしなくつても、己は直にその氣になれる。

メフイストフエレス　二六五五

まあ、洒落や笑談は廢にして、わたしは度々言ふ代に、一度はつきり言つて置きますが、あの好い子を手に入れるのは、さう早くは行きませんよ。一擧して拔くと云ふ砦ではない。詭の謀と云ふ面倒なので我慢しなくては。

フアウスト　二六六〇

そんならあいつの持物でも己の手に入れてくれ。あいつのいつも腰を掛ける場所へでも連れて行つてくれ。

あいつの胸に觸れたことのある巾でも、沓韉の紐でも好いから、戀の形見に手に入れてくれ。

メフイストフエレス　二六六五

わたしがあなたの苦をどうにかして上げるお手傳をする氣だと云ふことが、あなたにも分かるやうに、手間を取らせずに、けふのうちにあなたをあの娘の部屋へ連れて行きます。

フアウスト

そして逢はれるのか。手に入れられるのか。

メフイストフエレス　いゝえ。

當人は隣の上さんの所へ行つてゐるでせう。

その隙にあなたがひとりで
未來の樂を思ひ浮べながら、あの娘の肌の香の
籠つてゐる所にゐるのを心遣になさるが好い。

フアウスト　二六七〇

そんなら今から行かれるのか。

メフイストフエレス

まだ早過ぎます。

フアウスト

そんなら何かお土産に遣る物を心配して置いてくれ。

メフイストフエレス

直に遣りますか。それはがうぎだ。それなら成功します。
方々の好い所に昔埋めて置いた　二六七五

寶のあるのを、わたしは知つてゐます。
まあ、少し調べて見なくては。（退場）

夕。

小さき清げなる室。

マルガレエテ辮髪を編み結びなどしつつ。

マルガレエテ

けふのお方がどなただか知れるなら、
何か代に出しても好いと思ふわ。
大そうはき〳〵したお方のやうだつたこと。
きつと好い内の方だわ。
わたしお顔を見たら、すぐ分かつてしまつた。

でなくては、あんな不遠慮な事はなさらないわ。

（メフイストフエレス、フアウスト登場。）

メフイストフエレス

さあ、這入るのです。そつと、搆はずに。

フアウスト（暫く默りゐて。）

どうぞ己をひとりで置いて行つてくれ。

メフイストフエレス（四邊を探るやうに見つつ。）

なか〳〵どの娘でもかう綺麗にしてゐるものではないて。（退場。）

フアウスト（あたりを見廻す。）

この神聖な場所を籠めてくれる、
優しい、薄暗い黄昏時よ。好く來てくれた。
渴して纔かに吸ふ希望の露に命を繫いでゐる、

二六八五

優しい戀の苦しさよ。己の胸を占めてくれい。
靜けさ、秩序ある片附方、物に滿足してゐる心持が、
なんとなくこの周圍に浮動してゐるではないか。
この物足らぬ中になんと云ふ豐富なことだらう。
この人屋めいた中になんと云ふ祝福のあることだらう。

（寢臺の傍の鞣革の椅子に身を倚す。）

此椅子はあれがまだ生れぬ世を、喜につけ悲につけ、
腕を擴げて迎へ容れた椅子であらう。
己に掛けさせてくれ。家の長老の座の此椅子に、
幾度か取り卷く子等の群がぶら下がつたことであらう。
事に依つたら、あの子がまだふくらんだ頬をしてゐた時、
神聖なクリストの恩を謝して、此椅子に靠つてゐる

二六九〇

二六九五

二七〇〇

家の長老の萎びた手に、敬虔なキスをしたかも知れぬ。
あゝ。好い子よ。毎日お前に母のやうな指圖をして、
此卓の上に巾を綺麗にひろげさせ、
足に踏む砂をさへ美しく波立つやうにさせる、
その饒けさと整との精神が、　二七〇五
身の邊に戰いでゐるのを己は感ずる。
まあ、なんと云ふ可哀い手だらう。神々の手のやうな。
お前のお蔭で此小屋が天堂になるのだ。
そしてこゝは。

（手にて寢臺の帷の一ひらを搴ぐ。）

まあ、なんと云ふぞつとする嬉しさが襲ふだらう。
己はたつぷり何時間もこゝに立ちもとほつてゐたい。　二七一〇

自然よ。お前はこゝで輕らかな夢の中に、
唯一度しか生れぬ天使を育てたのだ。
優しい胸に溫い性命の滿ちてゐる
穉子がこゝにゐたのだ。
物を織り成す、神聖な、清淨な力で、
あの神々しい姿貌がこゝで發展したのだ。　二七一五

そこで貴樣はどうだ。何がこゝへ連れて來たか。
己は心の底から感動させられてしまふ。
貴樣はこゝで何をしようと思ふ。なぜさう胸が苦しうなる。
吝なファウスト奴。貴樣は見違へた奴になつたなあ。　二七二〇

禁厭の靄が己をこゝで包んでゐるだらうか。
驀直に受用しようと云ふ促が己を驅つて來たのに、
戀の夢に己は解けて流れるやうに感ずるではないか。
空氣の壓の變るまに〳〵己は弄ばれて變るのか。

若し此刹那にあれがこゝへ這入つて來たら、
己の無作法はどんなにか罪なはれるだらう。
大きなのろま男奴。なんと云ふ小さくなりやうだ。
大方あれが足の前に蕩けた樣になつて俯さるだらう。

メフイストフエレス登場。

メフイストフエレス

早くおしなさい。娘が下を遣つて來ます。

二七二五

フアウスト

行かう、行かう。己はもうこゝへは來ない。

メフイストフエレス

こゝに或る所から持つて來た、
一寸目方のある箱がありますがな。
兎も角もこれをそこの簞笥に入れてお置きなさい。
あの娘が見て氣が遠くなる程欲しがることは受合です。
あいつの體のいろんな物があなたのおもちやになるやうに、
わたしが此箱にいろんなおもちやを入れて置きました。
相手の子供は子供でも、こつちの細工は細工ですから。

フアウスト

さればさ。そんな事をしたものだらうか。

二七三〇

二七三五

メフイストフエレス　それに文句がありますか。

それとも此品物をあなたが持つてゐなさる積ですか。

そんならあなたも色氣なんぞを出して

結搆な暇を潰すことをお廢になり、

わたしにもこれから先の骨折を免じてお貰申したい。　二七四〇

まさかあなたは客なのではありますまいね。

あの可哀らしい小娘を

あなたの胸のお望どほりに靡かせようとしてゐる

わたしに、頭を搔かせたり、手を摩らせたりするのですか。　二七四五

（小箱を箪笥に入れ、鑰を卸す。）

さあ、早く逃げませう。

なんです、その顏は。

今から講堂へでも出て行かうと云ふのですか、

形而下學と形而上學とがさながら現はれて來て、

灰色な顏をしてあなたの前にでも立つてゐると云ふのですか。　二七五〇

さあ、逃げませう。（退場。）

マルガレエテ燈を乘りて登場。

マルガレエテ　なんだかこゝは欝陶しくて、むつとするやうだこと。

（窓を開く。）

その癖外はそんなに暑くもないのに。

わたしなんだか分からないが、變な心持がするわ。

早く母あさんがお内へお歸だと好い。　二七五五

なんだかかう體中がぞく〳〵してならない。
まあ、わたしはなんと云ふ馬鹿げた、臆病な女だらう。
（着物を脱ぎつつ歌ひ始む。）

「昔ツウレに王ありき。
盟は渝へぬ此君に、
妹は黄金の杯を
遺してひとりみまかりぬ。

こよなき寶の杯を
乾しけり宴の度毎に。
此杯ゆ飲む酒は
涙をさそふ酒なりき。

死なん日近くなりし時
國の縣の數々を
世嗣の君に讓りしに、
かの杯は留め置きぬ。

海に臨める城の上に
王は宴を催しつ。
壯士あまた宮のうち
御座の下に集ひけり。

これを限の命の火

盛れる杯飲み干して、
その杯を立ちながら
海にぞ王は投げてける。
落ちて傾き、沈み行く
杯を見てうつむきぬ。
王は宴の果ててより
飲まずなりにき雫だに。」

（着物を納めんと、箪笥を開き、小箱を見る。）

おや。どうしてこんな美しい箱が這入つてゐるのだらう。
わたし錠は慥かに卸して置いたのに。
本當に不思議だこと。何が入れてあるのだらう。

二七八〇

二七八五

誰か母あ様にお金を借りに來て
質に入れて置いたのかしら。
おや。こゝに鍵が紐で縛り附けてあるわ。
わたし開けて見ようや。
まあ、これはなんだらう。大した物だわ。こんな物は
わたし生れてからつひぞ見たことがないわ。
裝飾品だわ。どんな貴夫人がどんな宴會へでも
附けて行かれるだらうと思ふわ。
わたしにでも似合ふかしら。
一體誰のだらう。

（裝飾品を身に附けて鏡に向ふ。）

此耳輪だけでもわたしのだと好い。

二七九〇

二七九五

別な顔のやうに美しく見えるわ。
ほんとに若くても綺麗でもなんにもなりやしない。
それ丈でも好いには好いのだけれど、
人もそれ丈にしきや思つてはくれない。
二八〇〇
褒めるにでも氣の毒がりながら褒めるのだもの。
みんなに附いて來られるのも、
ちやほやして貰はれるのも、お金次第だわ。
わたしなんぞのやうに貧乏では爲方がないわ。

散歩

フアウスト物を思ひつつあちこち歩みぬる。そこへメフイストフエレス來掛かる。

メフイストフエレス

二八〇五
えゝ。食つた丈の肘鐵砲とでも云はうか。地獄のあらゆる景物とでも云はうか。これより胸の惡い事はない。

フアウスト

どうしたのだ。腹でもひどく痛いのかい。
己は生れてからそんな顔をしてゐる奴を見たことがない。

メフイストフエレス

わたしはもし自分が惡魔でなかつたら、
すぐに惡魔にさらつて行つて貰ひたい位です。

フアウスト

二八一〇
頭の中で何かが居所變でもしたのかい。
氣違のように跳ね廻るのは君の柄にはあるが。

メフイストフエレス

まあ、思つても見て下さい。娘に遣らうと思つて捜した、
あの裝飾品は坊主がふんだくつて行きました。　二八一五
お袋があれを見附けるや否や、
なんだか氣味が惡くなつたのですね。
一體あの女はいやに鼻の利く奴で、
いつも讃美歌集を嗅いでゐたり、
道具に一々鼻を當てて、これは神聖な物だ、
これは世間の物だと嗅ぎ分けたりするのです。　二八二〇
そこであの飾にあまり祝福なんぞが
附いてゐないのを、慥かに嗅ぎ出したのです。
お袋はかう云ひました。「お前、筋の惡い品物は

持つてゐても氣が詰まる。苦勞になつて血まで耗へる。　二八二五
これは聖母樣にお上げ申さうね。
さうすると天の蜜を下さるから」と云ひました。
すると娘は口を歪めてかう思つたです。
「まあ、貰つた馬は何とやらと云ふことがある。
それに誰が神樣に背くかと云ふと、
あれを親切にこゝへ持つて來た人ではあるまい。」　二八三〇
そこでお袋が坊主を呼んで來る。
坊主は話を聞くか聞かぬに、
もう貨物に見とれてゐる。
その言草が好い。「それは御殊勝な事でございます。
欲しい物をお捐になる丈、それ丈御利益があります。　二八三五

お寺の胃の腑は丈夫でございます。
これまで國を幾つも召し上がつても、
つひぞ食傷はなさりませぬ。
筋の惡い品物を召し上がつて消化なさるのは、
お前樣方にわしが言ふが、お寺ばかりだ。」

フアウスト　二八四〇

それは天下通用の遣方だ。
猶太人や王樣にも出來る。

メフイストフエレス

坊主は腕輪や指輪や鎖なんぞを、
三文もしない物のやうに引つ手繰つて。
胡桃を籠に一つ貰つた程の

二八四五

禮も言はずに、
いづれ報(むくい)は天からあると約束しました。
女どもはそれを難有がつたのですね。

フアウスト　二八五〇

そこでマルガレエテは。

メフイストフエレス

氣が落ち着かぬと云ふ風で、
何がしたいか、どうしたいか、自分で自分が分からずに、
夜晝(よるひる)貰つた寶の事を、それよりもくれた人の事を、
思ひ續けてゐるのです。

フアウスト

あの娘がさう胸を痛めては可哀さうだ。

君すぐに外の寶を搜し出して遣り給へ。
初のはさう大した物でもなかつたから。

メフイストフエレス

さうでせう。檀那樣が見れば萬事子供の戯だ。

フアウスト

そしてさつさと己の考通にして貰ひたい。
先づ君があの隣の女を手に入れなくちや行かん。
惡魔が粥のやうにべた〳〵してゐては困る。
外の裝飾品を急いで持つて來給へ。

メフイストフエレス

へえへえ。お易い御用でございます。

（フアウスト退場。）

二八五五

二八六〇

女にのろい男と云ふ奴は、その女の爲になら、
月でも日でも星を皆でも、
暇潰しに花火のやうに打ち上げでもします。（退場。）

隣の女の家

マルテ一人登場しゐる。

マルテ

まあ、内の檀那さんに罰が中らねば好いが。
わたしを隨分ひどい目にお逢はせなされた。
藁の上へひとり殘して置いて、
自分は世間へ飛び出しておしまひなされた。
不斷腹をお立になるやうなことをせずに、

二八六五

どんなにも大切にしてお上申す積でゐるのに。

（泣く。）

事によつたらもうお亡くなりなされたかも知れぬ。

鶴龜々々。せめて死亡證でも手に入つたら。

（マルガレエテ登場。）

マルガレエテ

をばさん。

マルテ

グレエテさんかえ。なんだい。

マルガレエテ

わたしびつくりして膝を衝いてしまひさうだつたの。

又こんな箱がわたしの簞笥に

二八七〇

二八七五

あつたのですもの。箱は黑檀でせう。

中に這入つてゐるものと云つたら、

こなひだのより、もつと、もつと立派なの。

マルテ

さうかい。それはおつ母さんに言はないが好いよ。

又懺悔の時に持つて行くと行けないから。

マルガレエテ

まあ、見て御覽なさいよ。それ。

マルテ（マルガレエテを裝飾す。）

まあ、お前さんはなんと云ふ爲合な子だらう。

マルガレエテ

だつて、かうして往來へ出たり、お寺へ行つたりすることが

二八八〇

出來ないのだから、詰まらないわねえ。

マルテ

いつだつてわたしの所へ來て、
そつと體に附けて見るが好いよ。
そして暫くの間、鏡の前を往つたり來たりして御覽。
わたしが一しよに樂んで上げるからね。
その中にはお祭かなんかで、好い折が出來ようから、
目立たないやうにぽつ〳〵體に附けて出るさ。
最初は鎖を掛けて出る。それから耳に眞珠を嵌める。
おつ母さんも氣は附くまいが、又何とか云ひ樣もあらうよ。

マルガレエテ

ねえ、をばさん。此箱を持つて來たのは誰でせう。

二八八五

二八九〇

なんだか氣味が惡いぢやありませんか。

（戸を敲く音。）

おや。大變だわ。おつ母さんぢやないでせうか。

二八九五

マルテ（窓掛を透し視る。）

知らない男の方だよ。お這入下さいまし。

メフイストフエレス登場。

メフイストフエレス

失禮ですが、ずん〳〵這入つてまゐりました。
どうぞ御免なさつて下さいまし。

（マルガレエテに敬意を表して卻く。）

マルテ・シユエルトラインさんにお目に掛かりたいのですが。

マルテ

マルテはわたくしでございます。なんの御用で。

メフイストフエレス（小聲にてマルテに。）　二九〇〇

お前さんですか。かうしてお目に掛かつて置けば好い。
お客樣はどちらの令嬢ですか。
どうも飛んだ失禮をしましたね。
いづれ午過ぎにでも又來ませう。

マルテ（聲高く。）

あら、まあ。グレエテさん。お聞よ。
この方がお前の事をどこかの令嬢だらうとさ。

マルガレエテ　二九〇五

まあ。わたし貧乏人の娘なのに、
このお方がそんな事にお思なさつては困るわ。

飾は皆わたしの物でもないのに。

メフイストフエレス　二九一〇

いえ。御裝飾品丈を見て云つたのではありません。
御樣子と、それにお目が鋭いので。
此儘ゐて宜しければ、こんな難有い事はありません。

マルテ

御用はなんですか。早く伺ひたいもので。

メフイストフエレス　二九一五

さやう。もつとめでたいお知らせだと好いが。
持つて來たわたしが怨まれなければ好いと思ふのですよ。
御亭主が亡くなりましたよ。お前さんに宜しくと云ふことで。

マルテ

おや、まあ。とう〳〵亡くなりましたの。
可哀さうに。本當に亡くなつたでせうか。あゝ。

マルガレエテ

まあ。をばさんしつかりなさいよ。

メフイストフエレス

まあ、氣の毒な最期を聞いて下さい。

マルガレエテ　二九二〇

だからわたし生涯男は持たなくつてよ。
亡くなつた時どんなにか哀しいでせう。

メフイストフエレス

悲の隣に喜があり、喜の隣に悲があるのです。

マルテ

どうぞ亡くなつた宿がどうなつたかお話なすつて。

メフイストフエレス　二九二五

あのパヅァ(Padua)の聖アントニウス(Antonius)のお傍で、
極難有い場所に
葬つて貰はれて、
そこを永遠に冷たい臥所にしてをられますよ。

マルテ

その外には何もおことづかりなすつたことはございませんか。

メフイストフエレス　二九三〇

まだ大したむづかしい事があるですよ。
お前さんに三百度のミサ(missa)を讀ませて貰ひたいさうで。
それから遺物と云ふものは何もありませんでした。

マルテ

まあ。諸國を廻る職人の徒弟でも、笈の底に飾の一つや、變錢の一つ位は取つて置いて、縱へ餓ゑても、乞食をしても、それは記念に殘すのに。

メフイストフエレス 二九三五

どうもお前さんには實にお氣の毒ですよ。併し實際無駄遣をしたわけでもありません。自分でも惡かつたと云つて後悔してゐました。さう。それよりも不爲合を怨んでゐました。

マルガレエテ 二九四〇

まあ。人間は不爲合のあるものでございますね。

わたくしもその方の爲に少しレクヰエム(requiem)でもお唱申しませう。

メフイストフエレス

お見受申す所、あなたはもう直にお嫁入をなさつても宜しさうでございます。愛敬のおありになる方ですね。

マルガレエテ

あら。まだなか〳〵そんな事は出來ませんわ。

メフイストフエレス 二九四五

それは御亭主でなくても、差當好い方と御交際なさるが好い。只いとしい、可哀いと抱き合ふばかりでも、世の中の主な樂の一つです。

マルガレエテ

そんな事は此土地ではいたさぬ事になつてゐます。

メフイストフエレス

さうなつてゐても、ゐなくても、すれば直出來ます。

マルテ

もし。まだお話がございませうが。

メフイストフエレス

えゝ。息を引き取りなさる所に、わたしは附いてゐましたが、五味溜よりは少し好い、腐り掛かつた藁の上でした。でも信者として死なれましたよ。まだ大ぶ罪滅がせずにあると云つて。さう云はれましたつけ。「己は自分が心からいやだ。こんな渡世のお蔭で、女房をあゝして置いて死ぬるのだから。あゝ。思ひ出すと溜まらなくなる。

二九五〇

二九五五

どうぞ此世で己の罪を免してくれれば好いが。」

マルテ（泣きつつ。）

可哀さうに。わたしはもう疾つくに免して上げたのに。

メフイストフエレス

「だが神樣が御存じだ。己より女房が惡かつたのだ。」

二九六〇

マルテ

嘘ばつかし。そんな事を。死際に嘘を衝くなんて。

メフイストフエレス

へえ。わたしには餘りよくは分からないが、斷末魔の譫語だつたかも知れません。さう云ひましたつけ。「己はうつかりぽんとしてゐたことはなかつた。子供は出來る。パンを稼ぎ出さなくてはならぬ。

二九六五

パンも極廣い意味のパンだからなあ。
そして落ち着いて己の分を食ふことも出來なんだ。」

マルテ

まあ。あんなにわたしは夜晝となく働いて、
萬事親切に世話をして上げたのを忘れてさ。

メフイストフエレス　二九七〇

いゝえ。其事は心から喜んでゐたのですよ。
さう云ひましたつけ。「マルタ島(Malta)を立つ時は、
己は女房子供の爲に、心からの祈禱をした。
丁度首尾好くスルタン(sultan)の
寶を積んだトルコ(turco)の船を
こつちの船が攫まへた。

骨折甲斐のある爲事で、
貰ふ丈の割前は
己も貰つた。」

マルテ

まあ。どうしたでせう。どこかへ埋めでもしたでせうか。

メフイストフエレス　二九七五

ところがそれを東西南北、どこへ風が飛ばしたやら。
ナポリ(Napoli)へ着いて知らぬ町をぶらついてゐるうちに、
綺麗首が衒へ込んで、
死ぬる日までもあの男の骨に應へる、
結構なおもてなしをしたのですね。

マルテ　二九八〇

まあ、ひどい人だこと。孫子の物を盗んだのだよ。
どんなに落ちぶれても、困つても、
浮氣は止まなかつたのかねえ。

メフイストフエレス

さうですよ。だがその報には死にました。
まあわたしがお前さんなら、
こゝの所一年程おとなしく喪に籠つてゐて、
そのうちそろ〳〵替の人でも捜すですね。

マルテ

そんな事を仰やつても、先の亭主のやうな人は、
世間は廣いが、めつたには見附かりません。
ほんに可哀い氣前の男でござんした。

二九八五

二九九〇

疵はあんまり旅が好で、
よその女やよその酒に現を抜かし、
お負に博奕を打ちました。

メフイストフエレス

なる程、なる程。そこで男の方からも、
ざつとその位大目に見てゐたとすると、
隨分旨い話でしたな。
そんな條件の附く事なら、わたしなんぞも
難有くあなたの御亭主になりますなあ。

マルテ

おや。御笑談ばかし仰やいます。

メフイストフエレス（獨語。）

二九九五

三〇〇〇

おつとどつこい。そろ〳〵此場を逃げなくては。

本物の惡魔の詞質をも此女は取り兼ねんぞ。

（マルガレエテに。）

ところで、あなたのお胸の御都合は。

マルガレエテ

へえ。なんと仰やいます。

メフイストフエレス（獨語。）

ふん。憎い程おぼこだなあ。

（聲高く。）

いや。どなたも御機嫌好う。

マルガレエテ

さやうなら。

マルテ

あの、ちよつと伺ひますが、

宿がいつ、どちらで、どんな風に亡くなつたと云ふ

書附がありましたらと存じます。

わたくしは何事も極まりの附かないことが嫌で、

出來ます事なら新聞にも書いてお貰申したいので。

メフイストフエレス

なに、お前さん。證人が二人あれば、

どこでも言分は通ります。

わたしには好い友達が一人ゐますが、

そいつが一しよになん時でも裁判所へ出て上げます。

そのうち連れて來ませうよ。

マルテ

そんならどうぞそんな事に。

メフイストフエレス

え〻と、このお嬢さんもこゝにお出になるのですね。
わたしの友達は好い奴です。世間を廣く渡つて來て、
御婦人方に失禮な事はいたしません。

マルガレエテ　三〇二〇

あんな事を仰やるのですもの。お恥かしくて。

メフイストフエレス

いえ。王様の前へお出になつてもお恥かしがりなさいますな。

マルテ

そんならあちらの奥庭で、お二人のお出を

お待申してをりませう。

街

フアウストとメフイストフエレスと登場。

フアウスト　三〇二五

どうだい。運ぶかい。近いうちにどうかなるかい。

メフイストフエレス

えらい。大ぶ氣乘がして來ましたね。
もう程なくグレエテはお手に入ります。
隣のマルテと云ふ女の所で今晩お引合をします。
取持や橋渡には
持つて來いと云ふ女ですよ。　三〇三〇

フアウスト

旨いな。

メフイストフエレス

所でこちとらも物を頼まれましたよ。

フアウスト

それは魚心あれば水心だ。

メフイストフエレス

なに。その女の亡くなつた亭主の髑髏が、バヅアの難有い墓地に埋めてあると云ふ、法律上に有効な證書を書いて遣る丈です。

フアウスト

好いとも。そんならバヅアへ行つて來なくては。

メフイストフエレス

サンクタ・シンプリチタスだ。神聖なるおめでたさ加減だ。*Sancta simplicitas*

それに及ぶものですか。知らずに書いて遣るのです。

フアウスト

外に智慧が出ないのなら、その計畫は廢案だ。

メフイストフエレス

いやはや。おえらいぞ。そこで君子をお出しになる。

一體僞證と云ふものをなさるのが、

こん度が始のお積ですかい。

これまであなたは仰山らしく、神はどうだ、世界やその中に動いてゐる物はどうだ、人間やその心の中で考へてゐる事はどうだと、定義をお下しになる。

しかもしやあ〳〵として大膽にお下しになる。
好く胸に手を置いて考へて御覽なさいよ。
正直のところ、そんな事をシュヱルトラインと云ふ男の
死んだ事より確かに知つてお出になつたのですか。

フアウスト

ソフイスト奴。どこまでも君は嘘衝だなあ。
Sophist

メフイストフエレス

そのあなたの腹をもつと深く知らなんだら、
恐れ入るでせうよ。あしたになると濟まし込んで、
心からお前を愛するなんぞと、
あのグレエテを騙すのでせうが。

フアウスト

三〇五〇

それは心から愛してゐるのだ。

メフイストフエレス

宜しい。
それから何物にも打ち勝つ、只一つの熱情だの、
永遠に渝ることのない戀愛だの眞實だのと、
いろ〳〵並べるのも心からでせうか。

フアウスト

廢せ。それは心からだ。己が感じて、
その感じ、その胸の悶を
なんとか名づけようとして、詞が見附からないで、
そこで心の及ぶ限、宇宙の間を搜し廻つた擧句に、
最上級の詞を攫まへて、

三〇五五

三〇六〇

己の體を焚くやうな情の火を、
無窮極だ、無邊際だ、永遠だと云つたと云つて、
それが惡魔もどきの嘘事かい。

メフイストフエレス

それでもわたしのが本當です。

フアウスト

おい。これ丈は覺えてゐろ。
賴むから、己の吭を少しいたはつて貰ひたい。
誰と議論をする時でも、只一言しか言はずにゐれば、
それは勝つに極まつてゐる。
そろ〳〵行かう。もう己も饒舌り厭きた。
君のが本當だとも。己は外に爲方がないのだから。

三〇六五　三〇七〇

園

マルガレエテはフアウストの肘に手を掛け、マルテはメフイストフエレスに伴れて、園内を往反す。

マルガレエテ

あなたわたくしをおいたはりになつて、ばつを合せて
入らつしやるかと存じますと、お恥かしうございますの。
旅をなさるお方のお癖で、詰まらない事をも
お情に我慢してお聞遊ばすのですわ。
いろ〳〵な目にお逢になつたお方に、詰まらないお話が
お慰にならないのは、好く分かつてゐますわ。

フアウスト

三〇七五

いや。あなたが一目ちよいと見て、一言ちよいと言つて下さると、
それが世界のあらゆる智識より面白いのです。

（女の手に接吻す。）　三〇八〇

マルガレエテ

あら、我慢してそんな事をなさらないが宜しうございますわ。
こんな手にキスを遊ばして。こんな見苦しいがさ〴〵した手に。
それはいたさなくてはならない爲事が澤山ございますの。
母あ樣が隨分やかましうございますから。

（行き過ぐ。）

マルテ

そしてあなたはこれからも旅ばかりなさいますの。　三〇八五

メフイストフエレス

えゝ。どうも職業と義務とに追ひ廻されるので。
土地によつては立つて行くのがつらいのですが、
居据わることが出來ないから爲方がありません。

マルテ

それはお若いうちに、そんなに世界中をあちこちと
所嫌はずにお歩きになるのも好いでせう。
でもいつかお年がお寄になつて、
鰥夫の儘で墓へ行く道を足を引き摩つて
お出になるのは、どなただつておいやでせうに。　三〇九〇

メフイストフエレス

さうです。それが向うに見えるから不氣味です。

マルテ

ですから早くそのお積で御思案をなさらなくては。

（行き過ぐ。）

マルガレエテ

だつてお目の前にゐなくなれば、お忘なさいますわ。

お世辭を仰やり附けて入らつしやるのですもの。

わたくしなんぞより物事のお分かりになるお友達に、

これまで度々お逢になりましたでせう。

フアウスト　三一〇〇

大違です。物事が分かつてゐると云ふのが、どうかすると

自惚と鼻の先思案ですよ。

マルガレエテ　三一〇九五

ええ。

フアウスト

實に無邪氣と罪のなさとが、自分を知らずに、

自分の神聖な値打を知らずにゐるのが不思議です。

一體謙遜だの卑下だのと云ふものこそ、博愛な

自然の配る賜の一番上等なものですのに。　三一〇五

マルガレエテ

本當にあなたがちよいとの間搆まつてゐて

下さいますと、わたくしは生涯お忘申さないのですが。

フアウスト

あなたは一人でお出の事が多いのでせうね。

マルガレエテ

ええ。わたくし共の所は小さい世帶でございますが、

それでもどうにかいたして行かなくてはなりませんの。

女中はゐませんでせう。煮炊やら、お掃除やら、編物やら、

爲立物やらいたします。朝から晩まで驅けて歩きます。

それは母あ樣は何につけても

凡帳面でございますから。

本當はそんな儉約をいたさなくても濟みますの。

餘所よりは餘つ程暮らして行き好うございますの。

父がちよいといたした財産と、町はづれに

庭の附いた小さい家を殘してくれましたものですから。

でも此頃は大ぶ落ち着いて暮らす日がございますの。

兄は兵隊に出ますし、

妹は亡くなりますし。

三一一〇

三一一五

三一二〇

隨分わたくし赤さんには困りましたわ。

その癖あの世話ならもう一度いたしたいと思ひますの。

本當に可哀い赤さんでしたもの。

フアウスト

あなたに似たら、天使でしたでせう。

マルガレエテ

わたくしが育てたものですから、好く馴染んでゐましたの。

お父う樣が亡くなつてから生れましたでせう。

母あ樣はとても助からないと云はれる程

お弱になつて休んで入らつしやいましたの。

ですからおひだちになるのもじり〳〵でございましてね。

ですから赤さんにお乳をお上げなさることなんぞは

三一二五

三一三〇

思ひも寄らなかつたので、
わたくしが一人で牛乳に水を割つて
育てましたの。ですからわたくしの子になりましたの。
抱つこして遣つたり、膝に載つけて遣つたりいたすと、
嬉しがつて、跳ねて、段々大きくなりましたの。

ファウスト　三一三五

あなたはきつと人生の最清い幸福を味つたのです。

マルガレエテ

それでも隨分つらい時もございましたわ。
夜になりますと、赤さんの寢臺を
わたくしの寢臺の傍に置いて、ちよいと動くと
目が醒めるやうにいたして置きましたの。

ファウスト　三一四〇

お乳を飲ませたり、抱つこして寢たりしましても、
泣き罷まないときは、抱いて起きて、
ゆさぶりながら部屋の中を歩きました。
それでも朝はお早く起きて、お洗濯物をいたします。
それから市場へまゐつたり、煮炊をいたしたりいたします。
毎日毎日そんな按排でございましたの。

ファウスト　三一四五

ですからいつも氣が勇んではゐませんでしたわ。
その代御飯がおいしくつて、夜は好く休まれますのね。
（行き過ぐ。）

マルテ

女は本當にどうして好いか分かりません。
一人が好いと仰やる方は手の附けやうがないのですもの。

ファウスト　三一五〇

メフイストフエレス

わたしなんぞを改心させるのは、
お前さんのやうな方の腕次第です。

マルテ

打ち明けて仰やいよ。まだ好い人をお見附なさらないの。
もうどこかの人にお極になつてゐるのではありませんか。

メフイストフエレス

諺がありますね。「じまへの竈に實のある女房は
金と眞珠の値打がある。」

マルテ

どこかでその氣におなりになつたでせうと云ふのですよ。

メフイストフエレス

えゝ。隨分方々で丁寧にしてくれましたよ。

マルテ

でも眞面目にお氣に入つたのはありませんかと云ふのですよ。

メフイストフエレス

婦人方に笑談なんか云つては濟みませんとも。

マルテ

あら。お分かりにならないのですね。

メフイストフエレス

どうも申しわけがありません。
兎に角あなたが御親切だと云ふことは分かつてゐます。
（行き過ぐ）

フアウスト

わたしだと云ふことが、庭へ這入つた時
すぐに分かりましたか。

マルガレエテ

わたくしの俯目になつたのがお分かりにならなくつて。

フアウスト

そんならこなひだお寺からお歸なさる時、

三一六五

御遠慮もしないで、厚かましい事をしたのを、
堪忍して下さるでせうね。

マルガレエテ

今までつひぞない事ですから、びつくりしましたわ。
わたくし惡い評判をせられた事はありませんでせう。
ですからどこかわたくしの様子に下卑た、不行儀な

三一七〇

處のあるのをお見附なされたかと存じて。
どうにでもなる女だと、
すぐお思になつたやうでしたもの。
申してしまひますが、その時はあなたが好いお方だと
思ふ心持がし始めたのには、氣が附きませんでしたの。
でももつとおこつてお上申すことの出來なかつたのは、
慥かに悔やしいと存じましたわ。

三一七五

フアウスト

可哀い事を言ふね。

マルガレエテ

ちよつと御免なさいまし。
（江南紫を摘み、葉を一枚一枚むしる。）

フアウスト　どうするの。花束。

マルガレエテ　いゝえ。遊事ですの。

フアウスト　えゝ。

マルガレエテ　厭。お笑遊ばすから。

（マルガレエテ葉をむしりつゝつぶやく。）

フアウスト　何を言つてゐるの。

マルガレエテ　（中音にて。）

お好。お嫌。

フアウスト　可哀い顔をしてゐることね。

マルガレエテ　（依然つぶやく。）

お好。お嫌。お好。お嫌。

（最後の葉をむしりて、さも喜ばしげに。）

お好だわ。

フアウスト　好だとも。その花の占を神々の詞だとお思。わたしはきつとお前を好いてゐる。お前分かるかい。男に好かれてゐると云ふ意味が。

（フアウスト娘の兩手を把る。）

マルガレエテ

わたくしなんだか體がぞつとしますわ。

フアウスト

そんなにこはがるのぢやない。このお前を視る目、
お前の手を握る手に、口に言はれない事を
言はせておくれ。

三一九〇

わたしは命をお前に遣る。そして永遠で
なくてはならない喜を感じる。永遠だ。
若し此心持が消える時が來たら、絶望だ。
いや。消える時は無い。終は無い。

（マルガレエテ手を強く締めて、さて振り放し、走り去る。フアウスト立ち止まりて思案すること暫くにして、跡に附き行く。）

マルテ（登場しつつ。）

もう日が暮れます。

メフイストフエレス

さうです。わたくし共は行かなくては。

三一九五

マルテ

も少しお止申したいのですが、
何分人氣の惡い土地で、
近所のもののする事なす事を見張つてゐるより外、
誰一人自分の用事は
ないかとさへ思はれるのでございます。ですからどんなに
氣を附けても、兎角彼此申します。

三二〇〇

あのお二人は。

メフイストフエレス

あの道を驅けて行きましたよ。

夏の小鳥のやうに元氣な人達だ。

マルテ

あの方のお氣に入つたやうですね。

メフイストフエレス

娘さんも氣があるらしい。世間はさうしたものですよ。

四阿屋

マルガレエテ飛び込み、扉の背後に躲れ、右の示指の尖を脣に當て、隙間より外を窺ふ。

マルガレエテ

入らしつた。

フアウスト登場。

フアウスト

横着ものだね。わたしを揶揄ふなんて。

そら攫まへたぞ。（接吻す。）

マルガレエテ

（抱き着き、接吻し返す。）

あなた。心から可愛くてよ。

メフイストフエレス戸を敲く。

フアウスト（足踏す。）

誰だ。

メフイストフエレス　お連です。

フアウスト　畜生。

メフイストフエレス　そろ〳〵お切上なさらなくては。

マルテ登場。

マルテ　本當に遲くなりますよ。

フアウスト　送つて行つては行けないかい。

マルガレエテ　行かなくてはならんかなあ。

三三〇

それこそ母あ樣が。さやうなら。

フアウスト　そんならこれで。

マルテ　御機嫌好う。

マルガレエテ　こん度はお早くね。

三三一

（フアウスト、メフイストフエレス退場。）

まあ。…あゝ云ふ男の方と云ふものはいろ〳〵な事にお氣が附くこと。わたしぼんやりして立つてゐて伺つて、

何を仰やつても、はい〳〵と云ふ切だわ。
わたし、まあ、なんと云ふ馬鹿な子だろ。
わたしのどこがお氣に入るのかしら。（退場。）

三二一五

森と洞。

フアウスト一人。

フアウスト

崇高なる地の精。お前は己に授けた。己の求めたものを
皆授けた。餘の中でお前の顔を
己に向けてくれたのも、徒事ではなかつた。
美しい自然を領地として己にくれた。
それを感じ、受用する力をくれた。只冷かに

三二二〇

境に對して驚歎の目を睜ることを
許してくれたばかりでなく、友達の胸のやうに
自然の深い胸を覗いて見させてくれた。
お前は活動してゐるものの列を、己の前を

三二二五

連れて通つて、森や虚空や水に棲む
兄弟どもを己に引き合せてくれた。
それから暴風が森をざわつかせ、きしめかして、
折れた樅の大木が隣の梢、
隣の枝に傍杖を食はせて落ち、
その音が鈍く、うつろに丘陵に谺響する時、

三二三〇

お前は己を静かな洞穴に連れ込んで、己に己を
自ら省みさせた。その時己の胸の底の

祕密な、深い奇蹟が暴露する。
そして己の目の前に清い月影が己を宥めるやうに　三二三五
差し升つて來る時、岩の壁から、
濕つた草叢から、前世界の
白金の形等が浮び出て、
己の觀念の辛辣な興味を柔らげる。
あゝ。人間には一つも全き物の與へられぬことを　三二四〇
己は今感ずる。お前は己を神々に
近く、近くするこの喜を授けると同時に、
己に道連をくれた。それがもう手放されぬ
道連で、そいつが冷刻に、不遠慮に
己を自ら陋しく思はせ、切角お前のくれた物を、　三二四五

嘘き掛けた只の一息で、無にするのを忍ばねばならぬ。
そいつが己の胸に、いつかあの鏡の姿を見た時から、
烈しい火を忙しげに吹き起した。
そこで己は欲望から受用へよろめいて行つて、　三二五〇
受用の央に又欲望にあこがれるのだ。

メフイストフエレス登場。

メフイストフエレス

もう今までの生活は此位で澤山でせう。
さう長引いてはあなたに面白い筈がありませんから。
それは一度はためして見るのも好いのです。
これからは又何か新しい事を始めなくては。

フアウスト

ふん。己の氣分の好いのに、來て己を責めるよりは、
君にだつてもつと澤山用事があるだらうが。

メフイストフエレス　三二五五

いゝえ。御休息のお邪魔はしません。
そんな事をわたしに眞面目で言つては困ります。
あなたのやうな荒々しい、不愛想な、氣違染みた
友達は無くしても惜しくはありません。
晝間中手一ぱいの用がある。
何をして好いか廢して好いか、
いつも顏を見てゐても知れないのですから。

フアウスト　三二六〇

それが己に物を言ふ、丁度好い調子だらう。己を

退屈させて、お負にそれを難有がらせようと云ふのか。

メフイストフエレス　三二六五

わたしがゐなかつたら、あなたのやうな此世界の
人間はどんな生活をしたのですか。
人間の想像のしどろもどろを
わたしが當分起らぬやうにして上げた。
それにわたしがゐなかつたら、あなたはもう
疾つくに此地球にお暇乞をしてゐなさる。

フアウスト　三二七〇

なんの爲にあなたは木兎のやうに
洞穴や岩の隙間にもぐつてゐるのです。
なぜ陰氣な苔や雫の垂る石に附いた餌を
蟾蜍のやうに啜つてゐるのです。

メフイストフエレス　三二七五

結構な、甘つたるい暇の潰しやうだ。
あなたの體からはまだ學者先生が拔けませんね。

フアウスト

うん。かうして人里離れた所に來てゐると、
生活の力が養はれるが、君には分かるまい。
もしそれが分かつてゐたら、そんな幸福を己に
享けさせまいと、惡魔根性を出して邪魔をするだらう。

メフイストフエレス

現世以上の快樂ですね。
闇と露との中に、山深く寢て、
天地を好い氣持に懷に抱いて、
自分を神のやうにふくらませて、

三五二

三二八〇

三二八五

推思の努力で大地の髓を搔き撈り、
六日の神業を自分の胸に體驗し、
傲る力を感じつつ、何やら知らぬ物を味ひ、
時としては又溢れる愛を萬物に及ぼし、
下界の人の子たる處が消えて無くなつて、
そこでその高尚な、理窟を離れた觀察の尻を、
一寸口では申し兼ねるが、

（猥褻なる身振）

これで結ばうと云ふのですね。

フアウスト

ふん。怪しからん。

メフイストフエレス

三二九〇

お氣に召しませんかな。
御上品に「怪しからん」呼はりをなさるが宜しい。　三二九五
潔白な胸の棄て難いものも、
潔白な耳に聞せてはならないのですから、
手短に申せば、折々は自ら欺く快さを
お味ひなさるのも妨なしです。
だが長くは我慢が出來ますまいよ。
もう大ぶお疲が見えてゐる。　三三〇〇
これがもつと續くと、陽氣にお氣が狂ふか、
陰氣に臆病になつてお果になる。
もう澤山だ。あの子は内にすくんでゐて、
何をもかをも狹苦しく物哀しく見てゐますよ。

あなたの事がどうしても忘れられない。　三三〇五
あなたが無法に可哀いのですね。
あなたの烈しい戀愛が、最初雪解のした跡で、
小川が溢れるやうに溢れて、そいつをあなたは
あの子の胸に流し込んだ。　三三一〇
そこであなたの川は淺くなつたのですね。
わたくし共の考では、檀那樣が森の中の
玉座に据わつてお出になるより、
あの赤ん坊のやうな好い子に、惚れてくれた
御褒美をお遣になるが宜しいやうだ。
あの子は日が溜まらない程長いと見えて、
窓に立つて、煤けた町の廊の上を、　三三一五

雲の飛ぶのを見てゐます。
「わしが小鳥であつたなら。」こんな小歌を
晝はひねもす夜はよもすがら歌つてゐます。
どうかするとはしやいでゐる。大抵は萎(しを)れてゐる。
ひどく泣き腫れてゐるかと思へば、
又諦めてゐるらしい時もあります。
だが思つてゐることはのべつですよ。

フアウスト 三三二〇

蛇奴が、蛇奴が。

メフイストフエレス 三三二五

どうです。生捕られましたか。

フアウスト

惡黨。もうこゝにゐてくれるな。
そしてあの美しい娘の名を言つてくれるな。
半分氣の狂ひさうになつてゐる己の心の中に、
あの娘の體を慕ふ欲望を起させては困るからな。

メフイストフエレス 三三三〇

どうしようと云ふのです。娘はあなたが逃げたと
思つてゐる。實際半分逃げ掛かつてゐるのですね。

フアウスト

いや。實は己は矢張あいつの傍にゐる。よしや、もつと
遠く離れてゐたと云つて、己は忘れはせん、棄てはせん。
己はあいつの脣が觸れるかと思ふと、
主(しゅ)の體さへ妬ましくなるのだ。

メフイストフエレス 三三三五

メフイストフエレス

さうでせうとも。薔薇の下で草を食つてゐる
鹿の孑と云ふ奴には、わたしでさへ氣が採めた。

フアウスト

もうどこか行け。口入屋奴。

メフイストフエレス

澤山惡口をなさい。わたしは可笑しい。

三三四〇

男と女とを拵へた神樣も、
自分がすぐに取持をして見て、
こんな好い爲事はないと思つたのです。
まあ、行つてお遣なさい。悲慘極まつてゐます。
何も死ぬる所へお出なさいとは云はない。

好い人の閨へお出なさいと云ふのですよ。

フアウスト

それはあれを抱いてゐるのは、天國にゐるやうに嬉しいがな、

三三四五

あいつの胸で溫まつてゐる間でも、
あいつの苦勞を察して遣らずにはゐられぬ。
己は亡命者ではないか。無宿ものでは。
己は當もなく休まずに生きてゐる人非人だ。
譬へば好き好んで烈しく谷底へ落ちようと、
岩から岩を傳つて下る瀑布の水のやうなものだ。

三三五〇

それにあの子はどうだ。子供らしい、ぼうつとした
心持で、脇へ避けて、アルピの野の小家に住んで、
家の中でする程の事は、

皆小さい天地の間に限られてゐる。
それだのに、神に憎まれた己は、
岩々に打ち當つて、
それを粉な〳〵に碎いても
まだ厭き足らずに、
あの娘を、あの娘の平和を埋めねばならんのか。
地獄奴。これ程の犧牲が是非いるのか。
惡魔奴。どうぞ己の此煩悶の期間を縮めてくれ。
どうせかうなると云ふ事を、すぐさせてくれ。
あの娘の運命が己の頭に落ち掛かつて、
己を引つ浚つて底の深みに落ちても好い。

メフイストフエレス 三三五五

三三六〇

三三六五

又煮え立つて、燃え上がつて來ましたな。
早く行つて賺してお遣なさい。馬鹿な先生だ。
「兎角小さい頭だと云ふと、一寸出口が知れないと、
すぐに死ぬることを考へたがる。」
なんでも我慢し通す奴が萬歳です。
あなたなんぞはもう大ぶ惡魔じみて來てゐなさる。
絶望の爲に狼狽してゐる惡魔程
不似合なものは、先づ世界にありますまいぜ。

マルガレエテの部屋

マルガレエテ一人繰車の傍に坐しゐる。

マルガレエテ 三三七〇

心の落着無くなりて
胸重苦しくなりにけり。
尋ぬとも、その落着は
つひに歸らじ、とこしへに。

三三七五

いづくにも、彼人いまさねば、いづかにも
冢穴にしも異ならず。
苦きを嘗むる所とぞ
世の中は皆なりにける。

三三八〇

物狂ほしくもなれるかな、
あはれわがこの頭。

ちぎれ〳〵になりしかな、
あはれわがこの心。

三三八五

心の落着なくなりて、
胸重苦しくなりにけり。
尋ぬとも、その落着は
つひに歸らじ、とこしへに。

三三九〇

小窓よりわが見出だすは、
彼人來やと待つばかり。
門の外へわが出で行くは、
彼人迎へに行くばかり。

ををしき彼人の歩みざま。
けだかき彼人の姿。
その脣の微笑。
そのまなざしの力。

三三九五

その物語の
妙なる流。

三四〇〇

我手取りますそのみ手よ。
さて、あはれ、その口附よ。

心の落着なくなりて、

胸重苦しくなりにけり。
尋ぬとも、その落着は
つひに歸らじ、とこしへに。

三四〇五

胸の願は彼人に
そはんとおもふ外ぞなき。
わが腕もて彼人を
捉へまつり、止めまつらばや。

三四一〇

さて心ゆくまで彼人に
口附しまつらばや。
よしやわが身は彼人に

口附せられて消えぬとも。

マルテの家の園

マルガレエテとフアウストと登場。

マルガレエテ

あなた、お誓なすつて下さいましな。

フアウスト

うん。なんでも誓ふ。

マルガレエテ

あのお宗旨の事はどう思つて入らつしやるの。

あなたは大層お優しい方のやうですが、

お宗旨の事は格別に思つて入らつしやらないやうね。

三四一五

フアウスト

そんな事は措いてくれ。己がお前を好いてゐることは

分かるだらう。己は好いてゐる人達の爲には血も肉も

惜まない。又其人達の感情や宗教を奪はうとはしない。

マルガレエテ

あなたそれは惡いわ。お信じなさらなくては。

フアウスト

信ぜなくてはならんかなあ。

マルガレエテ

ほんにどうにかしてお上申したいわ。

あなた祕蹟だつてお敬なさらないでせう。

フアウスト

三四二〇

敬つてゐる。

マルガレエテ

でも心から願ひたいと思召さないでせう。
ミサや懺悔にももう長らくお出なさらないでせう。
神様をお信じなすつて。

三四二五

フアウスト

ふん。一體誰でも「己は神を信ずる」と
云ふことが出來ると思ふかい。
司祭にでもそんな風に問うて見るが好い。
その返事は只問うた人を
嘲るやうにしか聞えはしないのだ。

マルガレエテ

ではお信じなさらないの。

三四三〇

フアウスト

おい。はき違をするのぢやないぞ。
一體神の御名を口に唱へて、
「己は神を信ずる」と
告白することの出來るものがあらうか。
又自分がさう感じて、
「己は信ぜない」と云ふことを
敢てすることの出來るものがあらうか。

三四三五

萬物を包んでゐるもの、
萬物を保たせて行くものであつて見れば、
お前をも、己をも、自身をも

三四四〇

包んでゐて、保たせて行くだらうぢやないか。
天はあんなに上の方で中高になつてゐるぢやないか。
地はこんなに下の方で堅固になつてゐるぢやないか。
そして永遠な星は優しい目をして
升つて來るではないか。
かうして己とお前と目を見合せてゐると、
あらゆる物がお前の頭へ、
お前の胸へと迫つて來て、
永遠な祕密になつて、見えないやうに
見えるやうにお前の傍に漂つてゐるではないか。
それをお前の胸へ、胸はどれ程廣くても、一ぱいに
なる程入れて、その感じで全き祝福を得た時、

三四五〇

三四四五

それを幸福だとも、情だとも、愛だとも、神だとも、
お前の勝手に名づけるが好い。
己はそれに附ける名を知らない。
感じが總てだ。
名は天の火を罩む
霞と聲とに過ぎない。

マルガレエテ

あなたの仰やる事は皆美しい、結構な事で、
牧師樣の仰やるのも大抵同じやうですが、
お詞だけが少し違ひますのね。

フアウスト

それはあらゆる場所で

三四五五

三四六〇

あらゆる心の人が天の日の光を享けて、
それ〴〵の持前の詞で言ふのだ。
己だつて己の詞で言つて惡いといふ筈がない。

マルガレエテ 三四六五

それは只伺つてゐますと、可なり御尤なやうですが、
やつぱりどこか間違つてゐますのね。
あなたクリスト教では入らつしやらないのですもの。

フアウスト

そんな事を。

マルガレエテ

あんな友達のあるのが、
わたくし疾うから氣になつてゐましたわ。

フアウスト 三四七〇

どうして。

マルガレエテ

あのいつも御一しよに入らつしやる方ね、
あの方がわたくし心から厭でございますの。
あの方の厭らしい顔を見た時ほど、
胸を刺されるやうに思ひましたことは、
わたくし生れてからありませんでしたの。

フアウスト 三四七五

好い子だから、そんなにあいつをこはがるなよ。

マルガレエテ

なんだかあの方が入らつしやると血が落ち着きませんの。

一體わたくしどなたをだつて惡くは思はないのですが、
あなたの事をおなつかしく思ひますと一しよに、
あの方がなんだか不氣味でなりませんの。
それに横着な方かとも存じますの。
もし間違つたら、濟まないのですけれど。

フアウスト　三四八〇

矢張世間にはあんな變物もゐなくてはならないて。

マルガレエテ

わたくしあんな方と一しよにはゐたくないのよ。
いつも戸口から這入つて入らつしやつて、
なんだか人を馬鹿にしたやうな顔をなすつて、
それに少しおこつても入らつしやるやうね。

フアウスト　三四八五

まあ、人なんぞはどうなつても好いと云ふ風ね。
誰をも可哀がりたくなんざないと云ふことが
お顔に書いてありますやうね。

フアウスト　三四九〇

わたくしあなたにお縋申してゐると、氣樂な、
體をお任せ申してゐるやうな溫い心持なのに、
あの方が入らつしやると吭を締められるやうですの。

フアウスト

ふん。不思議に察しの好い子だなあ。

マルガレエテ　三四九五

そしてさう云ふ感じに負けてしまひますと、
あなたと二人でゐる所へ、あの方が來たばつかりで、
もうあなたとの中が元のやうでないやうに思はれますの。

それにあの方の入らつしやる所では、お祈が丸で出來ないので、
わたくし氣になつてなりませんの。
あなただつてそんなお心持がなさるでせう。

フアウスト 三五〇〇

詰まり性が合はないのだなあ。

マルガレエテ

もうわたくし行かなくちや。

フアウスト

あゝ。只の一時間も
落ち着いてお前と一しよになつてゐて、
胸と胸、心と心の通ふやうには出來ないのかなあ。

マルガレエテ 三五一〇

えゝ。それはわたくし一人で休むのですと、
今晩錠を掛けないで置くのですが、
母あ様がすぐ目を醒ますのですもの。
ひよつと母あ様に見附からうもんなら、
わたくしその場で死んでしまつてよ。

フアウスト 三五〇五

それか。それは造做もない事だ。
こゝに瓶があるがな、此藥を三滴
不斷飲みなさる物の中へ入れれば、
好い心持に寐て、何も分からなくなるのだ。

マルガレエテ 三五一〇

それはあなたの爲ですもの、なんでもしてよ。

毒になりやしませんでせうね。

フアウスト

毒になるやうなら、己がしろと云ふものか。

マルガレエテ

わたくしなぜだかあなたのお顔を見てゐると、
なんでも仰やる通にしなくてはならなくなつてよ。
わたくしもうあなたの爲にいろんな事をしてしまつて、
此上してお上申すことはないかと思ふわ。（退場。）

三五一五

メフイストフエレス登場。

メフイストフエレス

餓鬼奴。行つてしまひましたね。

フアウスト

三五二〇

又立聞をしてゐたのか。

メフイストフエレス

えゝ。すつかり聞いてゐましたよ。
先生箇條立をした試驗をお受になりましたね。
どうです、跡のお心持は。

三五二五

一體女と云ふ奴は、相手が昔流に信心深くて
素直だかどうだかと、氣にして穿鑿しますよ。
宗教にへこむ奴なら、自分の言ひなりにもなると思つて。

フアウスト

ふん。君には分からないのだ。
これでなくては祝福を受けられないと云ふ、
自分丈の信仰をたつぷり持つてゐる、

三五三〇

あの可哀らしい、誠實な女心に、
自分の一番大切だと思ふ男が失はれた子になつて
ゐはせぬかと、ひどく苦勞をしてゐるのぢやないか。

メフイストフエレス

いやはや。出世間で、しかも世間で、色氣のある
堺樣には困る。娘つ子が手の平で圓めますよ。

フアウスト

糞と火とから生れた畸形物の癖に。

メフイストフエレス

それに、あいつ奴、いやに人相に精しいと來てゐる。
己がゐると、なんだか變な氣持がする。
己の此面があいつには或る祕密の意味を語る。

あいつ奴、己が少くとも天才で、
事によつたら惡魔だと、感附いてゐやがる。
いよ〳〵今晩ですね。

フアウスト

大きにお世話だ。

メフイストフエレス

いゝえ。こつちにもそれが嬉しいのですからね。

井の端

水瓶を持ちたるグレエトヘン（マルガレエテ）とリイスヘンと。

リイスヘン

あなたバルバラさんの事を聞いて。

グレエトヘン

知らなくつてよ。人の出る所へ行かないのですもの。

リイスヘン　三五四五

本當なの。ジビルレさんがけふさう云つてよ。
とう〳〵騙されちまつたのだつてねえ。
上品振つた擧句だわ。

グレエトヘン

どうしたと云ふの。

リイスヘン

評判だわ。
飲食をするにも、二人養ふやうになつたのだとさ。

グレエトヘン

まあ。

リイスヘン　三五五〇

好い氣味だわ。
隨分長くあの男に食つ附いてゐたわねえ。
やれ散歩に連れて行く、
そりや村の踊場へ連れて行くと云ふ風で、
どこでも一番の女だと見せ附けて、
葡萄酒やバテを御馳走してねえ。
だもんだから自惚れて好い女の氣になつてゐたわ。
男に物なんか貰ふのを
恥かしいとは思はない程、根性が腐つてゐたのだわ。
舐め附いたり吸ひ附いたりしてさ。

グレエトヘン　三五五五

いつの間にか生娘ではなくなつてゐたのね。

グレエトヘン

可哀さうねえ。

リイスヘン

あなたなんかさう思つて。

わたしなんか絲取が忙しくつて、

おつ母さんが夜外へ出さないのに、

好い人の所へ降りて行つて、立話をしてゐたのね。

暗い廊下に立つたり、戸口のベンチに

掛けたりしてゐて、時が立つても平氣だつたわ。

その代今へこたれて、罪の襦袢を着て、

お寺へ行つてあやまるが好いわ。

三五六五

グレエトヘン

でもきつとあの人がお上さんに持つでせう。

三五七〇

リイスヘン

そんな事をすれば馬鹿よ。氣の利いた

男だもの。餘所でも樂に遊べるわ。

もう行つてしまつたつて。

グレエトヘン

まあ、ひどい事ね。

リイスヘン

若しお上さんになつたら、ひどい目に逢ふわ。

若い衆達は髪の青葉を引つ手繰るし、

わたし達は門口へ切藁を蒔いて遣るわ。（退場）

三五七五

グレエトヘン（家に歸りつつ。）

今までは餘所の娘が間違でもすると、
わたしもどんなにか元氣好くけなしただらう。
餘所の人のしたと云ふ罪咎を責めるには、
わたしもどんなにか詞數が多かつただらう。
人のした事が黑く見える。その黑さが
足りないので、一層黑く塗らうとする。
そして自然を祝福して、えらい人のやうに思ふ。
今は自分も犯してゐるのに。
だけれど、だけれど、それまでになる道筋は、
まあ、あんなに好かつたのに、あんなに美しかつたのに。

三五八〇　三五八五

外廓の內側に沿へる巷

石垣の中に作り込めたる龕に、受苦聖母の祈願像あり。
その前に花瓶。グレエトヘンそれに新なる花を插す。

グレエトヘン

痛おほきマリア樣。
どうぞお惠深く、お顏をこちらへお向遊ばして、
わたくしの惱を御覽なされて下さいまし。

お胸を刄に貫かれてお出なされ、
ちちの悲をお覺遊ばしながら、
御愛子の死を見そなはして入らつしやいます。

三五九〇

天にいます父をお見上なされて、
御子と御身との惱の爲に、
歎のみ聲を空へお送なさいます。

三五九五

わたくしの骨々に痛の
いかに徹るかを、
誰が覺えてくれませう。
哀な胸が何を案じ、何の爲にわななき、
何をほしがつてをりますか、
それを御承知なさるのはあなたばかりでございます。

三六〇〇

どこへまゐりましても、

胸のここがどんなにか
せつなく、せつなく、せつなうございませう。

三六〇五

人目がないと思ふ度に、
胸が裂けるかと思ふ程、
泣いて、泣いて、泣き通します。

三六一〇

さし上げまする此花を
けさわたくしが折つた時、
窓の前の植木鉢が
わたくしの涙で濡れました。

わたくしの部屋の内へ

朝日が明るくさし込みます時、
わたくしはもう床の上で
惱に沈んでをりまする。

どうぞわたくしが恥と死とを逃れますやうに。
痛おほきマリア様、
どうぞお恵深く、お顔をこちらへお向遊ばして、
わたくしの惱を御覽なされて下さいまし。

三六一五

夜

ゲレエトヘンが家の門前の街。
ゲレエトヘンの同胞兵卒ワレンチン登場。

ワレンチン

誰でも兎角自慢をしたがる
酒の座鋪に己がゐるとき、
友達どもが聲高に
町の娘の噂をして、
その褒詞を肴にして飲んでゐると、
己は氣樂に据わつてゐて、
頬杖を衝いて、
笑つて鬚を撫でながら、
みんなの詞を聞いてゐて、
先づ杯になみ〳〵と注がせて、
それからかう云つたものだ。「それはそんな娘もあらう。

三六二〇

三六二五

三六三〇

だがな、國中搜して歩いたつて、
内の可哀いグレエテルのやうな奴が、
あの妹のお給仕でも出來る奴がゐるかい。」
聲が掛かる。コップが鳴る。一座がざわつく。
「さうだ。あれは女性の飾だ」と、
聲を揃へて身方がどなる。
褒めた奴等が皆默つたものだ。
それがどうだ。頭の髪を搔きむしつても、
壁に這ひ登つても追つ附かない。
どの恥知らずでも、鼻に皺を寄せたり、
當擦(あてらすり)を言つたりして、己を馬鹿にしやがるのだ。
己は筋の惡い借金でもある奴のやうに、小さくなつて

三九二

三六三五

三六四〇

据わつてゐて、人の詞の端々に冷たい汗を搔かせられる。
片つ端からそいつらをなぐつてでも遣りたいが、
どうも嘘衝(うそつき)だと丈は云はれない。
や。遣つて來るのは、這ひ寄つて來やがるのはなんだ。
此目がどうかしてゐなけりやあ、あいつ等は二人連だな。
あいつがそなら、引つ攫んで、
此場を生かしては逃がさないぞ。

三六四五

三六五〇

フアウストとメフイストフエレスと登場。

フアウスト

丁度あの寺の坊主の休息所の窓から、
常燈明の火がさしてゐて、
それが窓を離れるに連れて段々微かになつて、